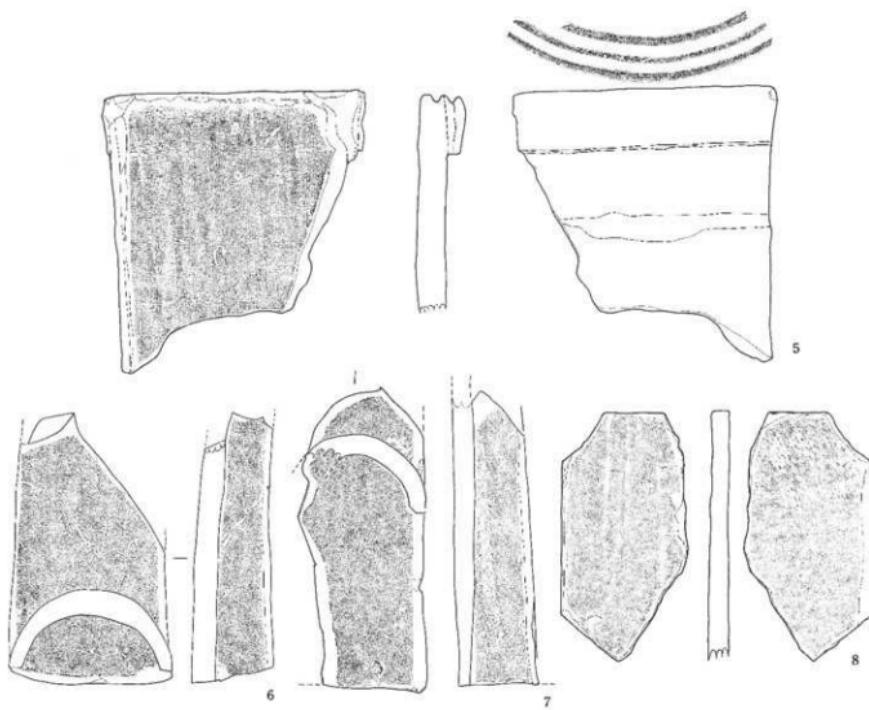


0 10cm



0 10cm

回数 番号	骨頭 番号	種別	器形	出土地點 馬十鹿遺跡	法長(cm)	外測調整	内面測定	備考	骨頭 次數	写真 回数
1 E-161	頭骨	蓋	SI370	頭骨	保存高10.0、口幅6.0	輪郭ロクナヂ、天井部斜縫ヘラケズリ	ロクロナヂ、カニリ有り	I.2	24	675
2 E-159	頭骨	蓋	SI375	頭骨	保存高10.0、口幅6.5	輪郭ロクナヂ、天井部斜縫ヘラケズリ	ロクロナヂ	II.1	24	
3 C-259	頭骨	環	SI376	頭骨	保存高42.0、口幅13.8	輪郭アリ(深浅)	ヘラミガキ、周辺破壊	AN.2a	21	
4 E-190	四肢骨		SI370	四肢骨	四肢25.5、胫膜(22.6)	ロクロナヂ、一部に自然歯	ロクロナヂ	24	675	
5 G-14	瓦	断下瓦	SI376	後壁	長さ28.3、幅27.3	凸面、平行テヌス、ヘラケズリ、ナテ、余付骨	凹面、ナテ、筋骨痕	IV.6	24	675
6 E-25	瓦	瓦	SI376	後壁	長さ27.9、幅16.6	凸面、輪郭スリケシ	凹面、余付スリケシ	IV.6	24	
7 E-24	瓦	瓦	SI376	後壁	長さ30.0、幅12.9	凸面、輪郭スリケシ	凹面、ナテ、余付骨	IV.6	24	675
8 G-12	瓦	平瓦	SI376	1	長さ25.5、幅13.1	[凸面、一部タタキメ、ナテ	[凹面、ナテ、余付骨	IV.6	24	675

第82図 SI376 出土遺物

SB1250建物跡（第83、111次・第84、85図）

桁行8間、総長17.4m（身舎部分柱間寸法230cm、廂部分柱間寸法195～205cmで平均200cm）、梁行5間、総長11m（身舎部分柱間寸法200～215cm、平均210cm、廂部分柱間寸法205～235cm、平均213cm）の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN—0°—Eである。柱穴は一辺80～170cmの隅丸長方形である。柱痕跡は身舎で直径30cm、廂で直径25～30cmである。柱穴の深さはSX24石敷遺構の上面から、身舎で150cm、廂で100cmである。

SX24石敷遺構を切っている。

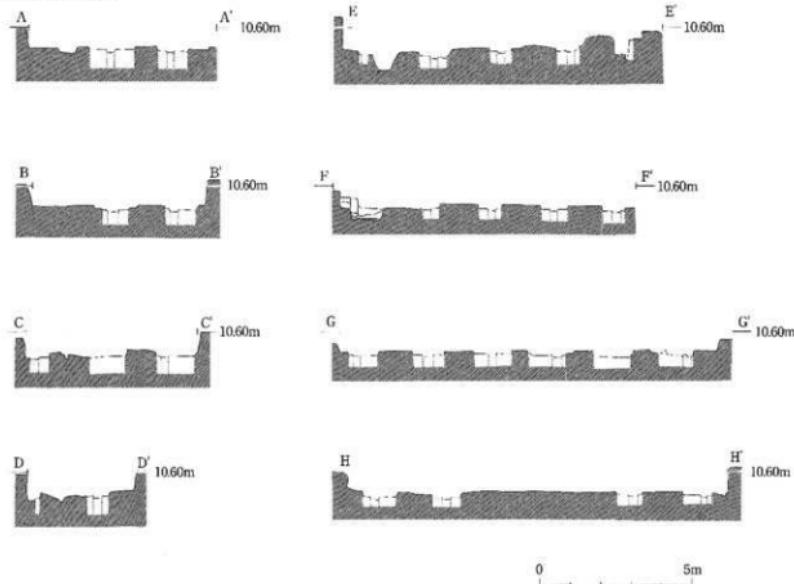
この建物跡は外郭南門の中心を通る方四町Ⅱ期官衙推定中軸線（註11）上にはば位置し、真東西方向を向き、周囲とは違う四面廂付きの建物である。建物の規模も秋田県秋田市に所在する秋田城跡や同県仙北郡仙北町の払田柵跡の政庁正殿と同等であり、方四町Ⅱ期官衙内の中心殿舎であると考えられる。発見当初から「正殿」あるいは「政庁正殿」として扱っている（第232図参照）。

SX24石敷遺構（第3、83次・第84、85図）

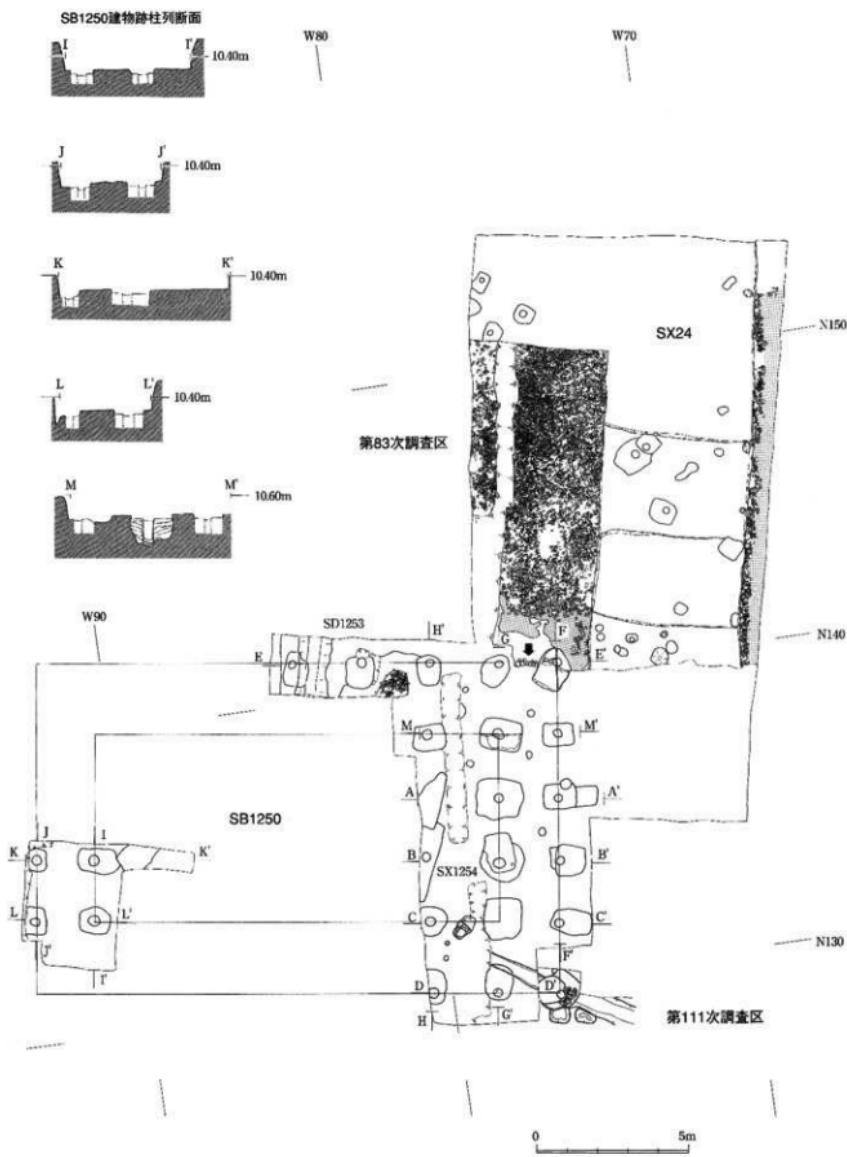
南北13m、東西11m以上に広がり、直径2～5cmの砂利を撒き詰めている。一部に拳大の扁平な円錐を用いている箇所がある。SB1250建物跡の北側にのみ広がっている。

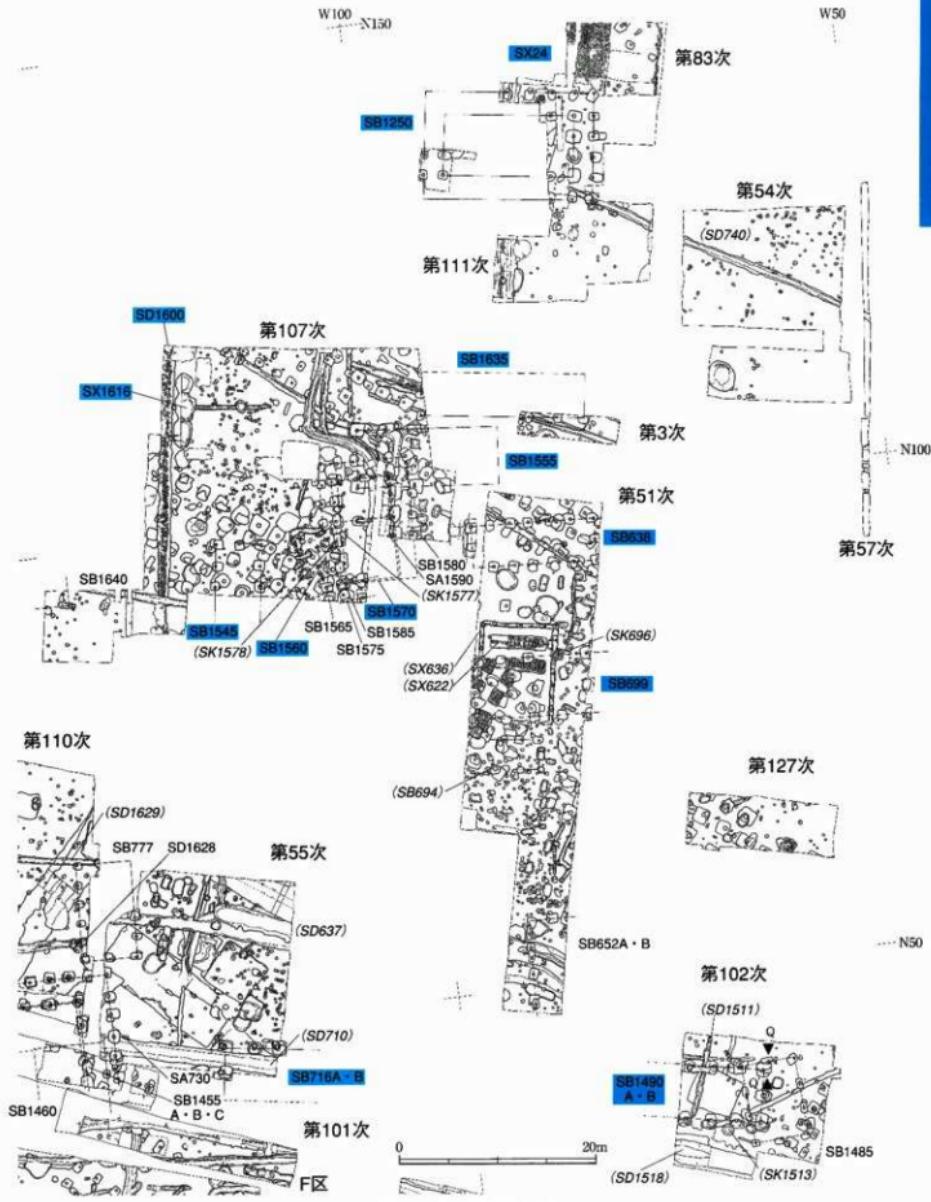
重複関係ではSB1250建物跡に切られているが、この石敷遺構がSB1250建物跡の内部に及ばず北桁行に沿って途切れていることや、柱筋に沿って河原石が整然と並ぶ箇所がある（第84図中事地点、写真図版314左端）など、同時期に存在していた遺構と見られる。また石敷遺構の下層において真北方向と異なる柱穴を検出していることから、I期官衙期の表土上か整地後に敷かれたもの（写真図版316）と考えられる。

SB1250建物跡柱列断面



第83図 SB1250 断面図





第85図 方四町Ⅱ期官衙中枢部 1

SB1545建物跡（第107次・第85、87、88回）

桁行3間以上、総長5.2m以上（柱間寸法204～228cm、平均218cm）、梁行2間、総長4.56m（柱間寸法228cm）の南北棟建物跡で、桁行の方向はN=0°～Eである。柱穴は一辺68～108cmの隅丸方形で、深さは60cmである。柱痕跡は直径18～28cmである。柱痕跡にわずかではあるが焼土と炭化物が含まれている。

SB1595A・B、1605建物跡を切っている。

SB1555建物跡（第107次・第85、87、88回）

推定で桁行5間、総長15m（柱間寸法288～292cm、平均290cm）、梁行2間、総長5.92m（柱間寸法292～300cm、平均296cm）の東西棟建物跡で、桁行の方向はE=0°～Sである。柱穴は一辺84～140cmの隅丸方形で、深さは100cm程度である。柱痕跡は直径29～32cmである。一部の柱穴に柱痕跡にはば密接して内側に東柱の痕跡が認められる。なお断面の観察からは建物の主柱が設置された後に一辺30cmの小規模な掘り方が掘られ、その中に直径20cmの柱材を設置したと考えられる。なおこの東柱痕跡は掘り方や痕跡自体が検出されない箇所もあり、設置された際の底面標高にやや違いがあると考えられる。また建物の内部となる位置で検出されたP76も、柱間寸法や配置から東柱の痕跡とみられる。

各柱穴の柱痕跡や抜き取り穴には多量の焼土が含まれ、掘り方には含まれないことから火災に遭っていると考えられる。

SA1615一本柱列、SB1610・1625建物跡を切り、SB1560・1570建物跡に切られている。

SB1635建物跡（第3、107次・第85、87、88回）

桁行6間、総長16.6m（柱間寸法280cm）、梁行2間かそれ以上、総長4.4mかそれ以上（柱間寸法220cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE=0°～Sである。柱穴は一辺50～100cmの隅丸方形である。柱痕跡は直径15～20cmである。

この建物跡は梁行と想定される方向の規模が不明であるが、真東西方向を向き、北に位置するSB1250建物跡と並び立つ様相を呈している。方四町II期官衙推定中軸線（註12）上にも位置しており、重要な遺構と考えられる。

SB716A・B建物跡（第55次・第85、87、88回）

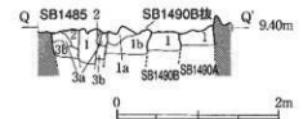
桁行2間以上、総長5.35m以上（柱間寸法245～290cm、平均270cm）、梁行1間以上、総長2.58m以上（柱間寸法258cm）の東西棟建物跡で、桁行の方向はE=2°～Sである。柱穴は一辺93～134cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは80～90cm、柱痕跡は直径27～30cmである。各々抜き取り穴を伴い、同位置、同規模での建て替えがある。

SB782建物跡、SI737堅穴住居跡を切り、SD710溝跡に切られている。

SB1490A・B建物跡（第102次・第85、87回）

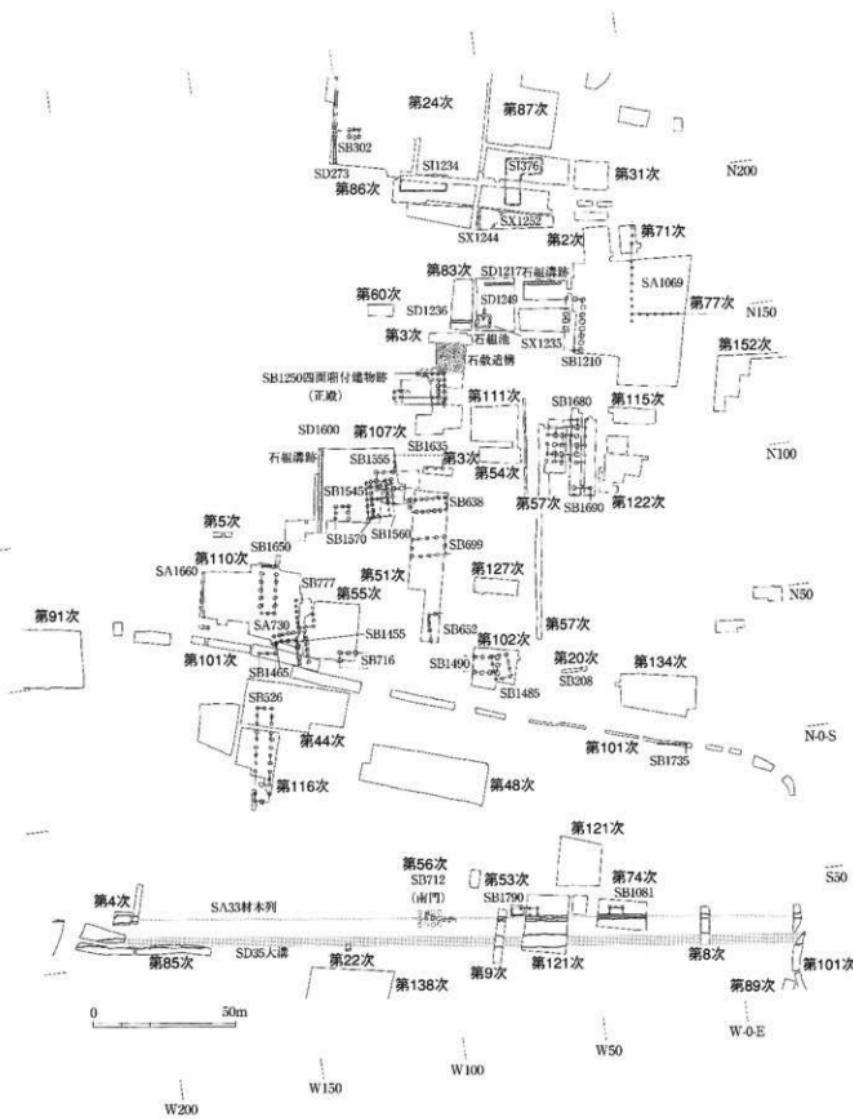
桁行4間以上、総長8.3m以上（柱間寸法245～267cm）、梁行2間、総長5.3m（柱間寸法260～265cm）の東西棟建物跡で、桁行の方向はE=3°～Sである。柱穴は一辺80～183cmの隅丸方形で、深さは75cm以上になる箇所がある。柱痕跡は直径30～32cmである。B建物跡の各柱穴には抜き取り穴が伴っている。古いA建物跡の柱穴は、B建物跡の柱穴と抜き取り穴との重複から検出されない箇所もある。AからBへの同位置、同規模での建て替えがあったと推定される。

SD1512・1519・1521溝跡、SI1495堅穴住居跡、SK1522上坑を切り、SB1485建物跡、SD1511溝跡、SK1513上坑に切られている。



編號	1	色	土性	備考
SB1485	1	10YR 2/4	暗褐色	粘土質シルト
	2	10YR 2/4	暗褐色	粘土質シルト にほい黄褐色シルトを含む
	3a	10YR 2/2	暗褐色	粘土質シルト 黄褐色 粘土質シルトを含む
	3b	10YR 2/3	暗褐色	シルト質粘土 炭化物を含む
SB1490B	8	褐色		
	1a	10YR 3/2	黒褐色	シルト質粘土 炭化物を含む
	1b	10YR 3/3	暗褐色	シルト質粘土 にほい黄褐色シルトを含む
SB1490B	1	10YR 4/1	褐灰色	粘土質シルト 陶化土を含む
SB1490A	1	10YR 3/4	暗褐色	シルト質粘土 明黄色 陶化土と質シルトを含む

第86図 SB1490 断面図



第87図 方四町Ⅱ期官衙主要造構配置図

SB638建物跡（第51次・第85、87、88図）

桁行6間、総長12.7m（柱間寸法191～250cm、平均212cm）、梁行2間、総長4.37m（柱間寸法210～227cm、平均218.5cm）の東西棟建物跡で、桁行の方向はE-3.5°-Nである。柱穴は一辺60～90cmの不整方形で、深さは30～74cmと不揃いである。柱痕跡は直径26～31cmである。一部の柱穴に抜き取り穴が認められる。II-B期である。

SB655建物跡を切っている。

SB699建物跡（第51次・第85、87、88図）

桁行5間以上、総長11.7m以上（柱間寸法280～303cm、平均296cm）、梁行2間、総長6m（柱間寸法300cm）の東西棟建物跡で、桁行の方向はE-3°-Nである。柱穴は一辺85～115cmの不整方形で、深さは25～85cmと不揃いである。柱痕跡は直径25～33cmである。一部の柱穴に河原石が入れられている。II-B期である。

SB700、701建物跡を切り、SA636断跡、SX622に切られている。

SB1560建物跡（第107次・第85、87、88図）

桁行6間、総長12.6m（柱間寸法168～224cm、平均205cm）、梁行5間、総長9m（柱間寸法168～196cm、平均184cm）の南北棟で、東西に廟を有する建物跡である。梁行の方向はE-6°-Nである。柱穴は身舎が一辺68～160cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径20～26cmである。廟では一辺48～96cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径16～22cmである。身舎は中央で3間×3間で仕切られている。II-B期である。

SA1615一本柱列、SB1555・1580・1605・1610建物跡を切り、SA1590柱列、SB1565・1570建物跡に切られている。

SB1570建物跡（第107次・第85、87、88図）

桁行5間、総長10.66m（柱間寸法188～242cm、平均215cm）、梁行3間、総長6.1m（柱間寸法172～248cm、平均214cm）の南北棟で、梁行の方向はE-6°-Nである。柱穴は一辺68～164cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径16～28cmである。掘り方の形状や規模にややばらつきがある。柱痕跡及び掘り方とともに、焼土、炭化物を含んでいる。II-B期である。

遺物は掘り方理土中より、底部が回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-386壺が出土している。

SB1555・1565・1605建物跡を切り、SA1590柱列などに切られている。

SX1616A・B・C（第107次・第85、88、89図）

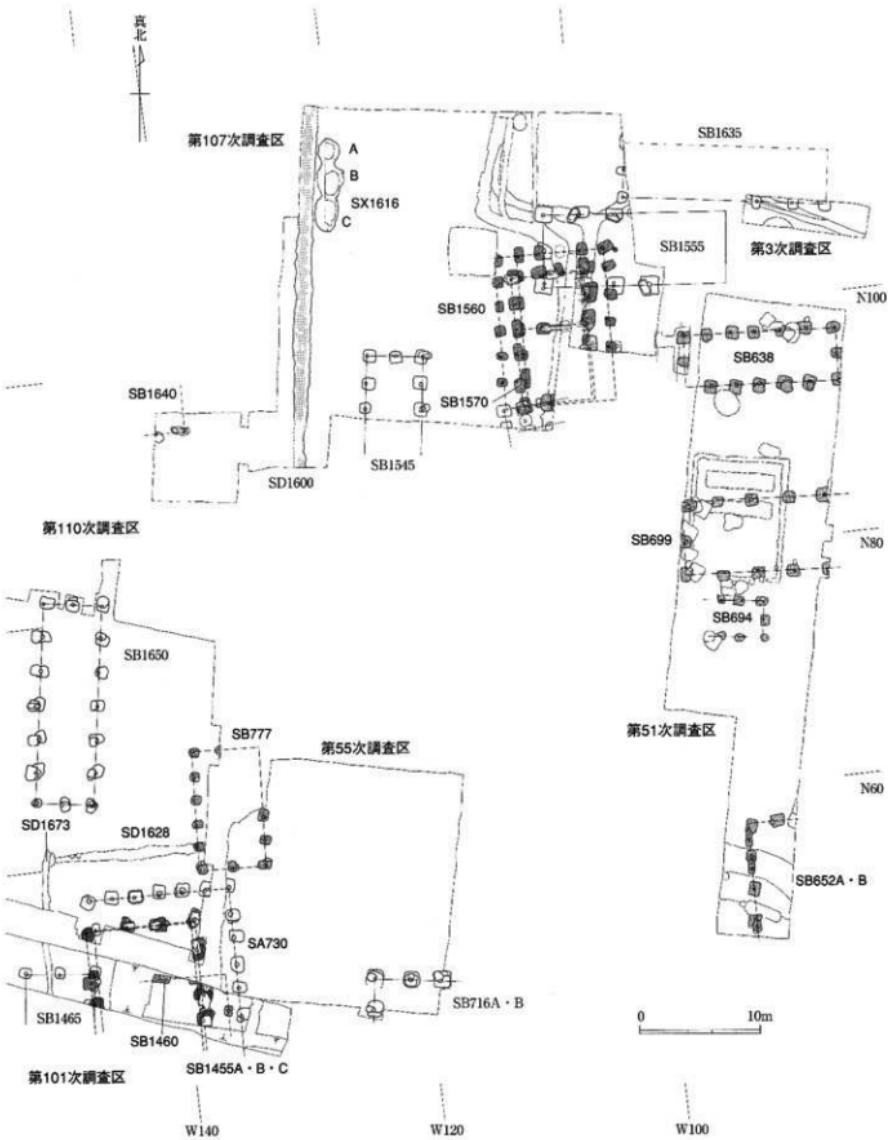
不整な梢円形の土坑が3基、南北に連結したような形態を呈している。各土坑は長軸188～292cm×短軸172～216cmで、検出した総長は7.6m程である。深さは43～52cmで、断面形は半球状である。底面には工具痕跡のような不規則な凹凸がある。堆積土はA、B、Cともほぼ同一（褐色シルトなど）で、同時期に埋められた様相を呈している。

遺物はSX1616B底面より、体部下端が屈曲し口縁部まで直線的に立ち上がる須恵器E-380高台付壺（第90図4）、SX1616Cの底面直上層より内面黒色処理され平底の土師器C-773壺（第90図5）、体部に稜をもち上は短く直立するE-377高台付壺（第90図3）、桶巻き作りの平瓦G-68（第90図8）、第1a層底面より底部がヘラ切り後に手持ちヘラケズリされたと見られる須恵器E-378壺（第90図1）、E-379壺（第90図2）、第1a層中より複数の沈線が巡り方形と見られる透かしのあるE-381円面鏡の小片（第90図6）、検出面よりは斜格子叩きの平瓦G-69（第90図7）が出土した。

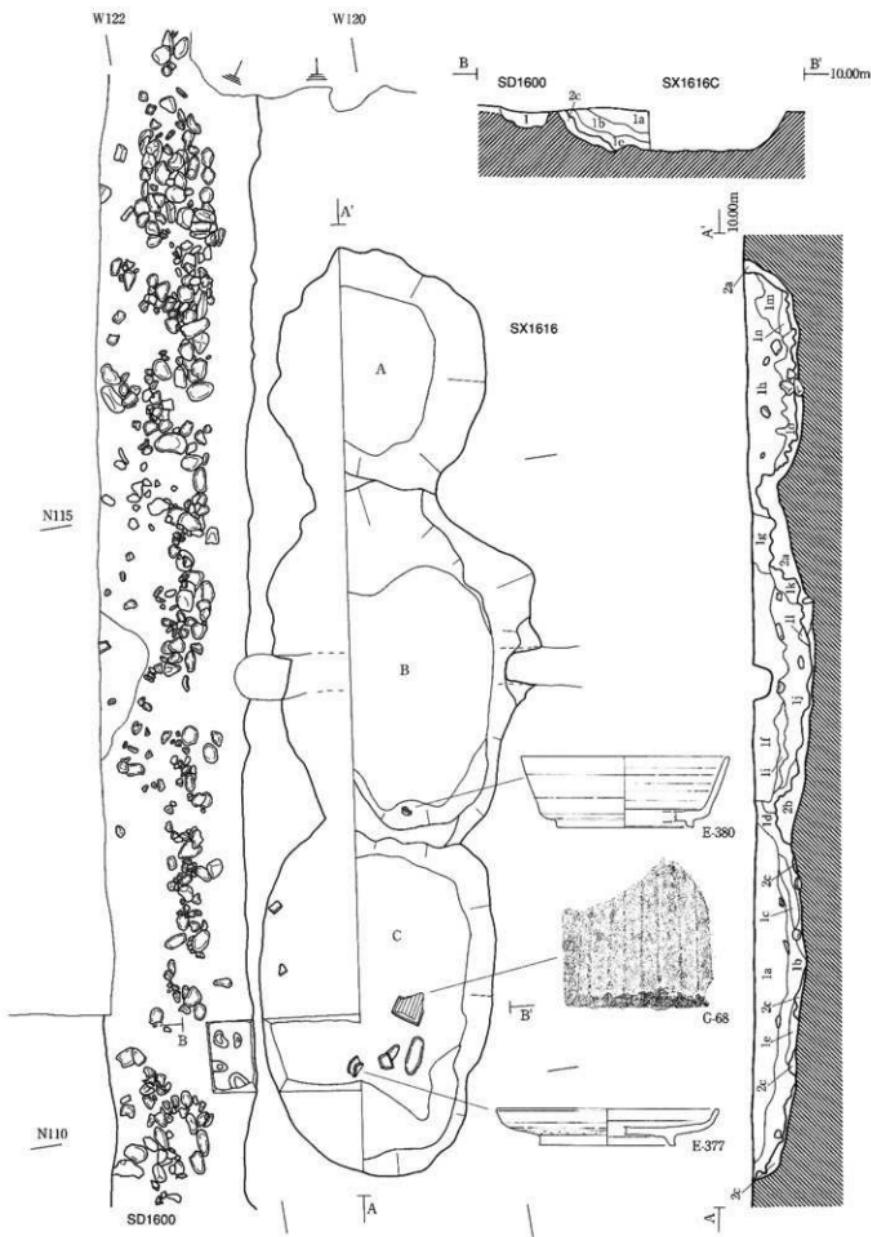
SX1616A・B・Cは形状からSD1600石組溝跡が地表に存する段階で掘り込まれたものと考えられる。「第6章考察 第1節出土遺物 2.須恵器」の検討から方四町II期官衙の最終末の遺構と考えられる。

SD1600石組溝跡（第107次・第85、87、88、89図）

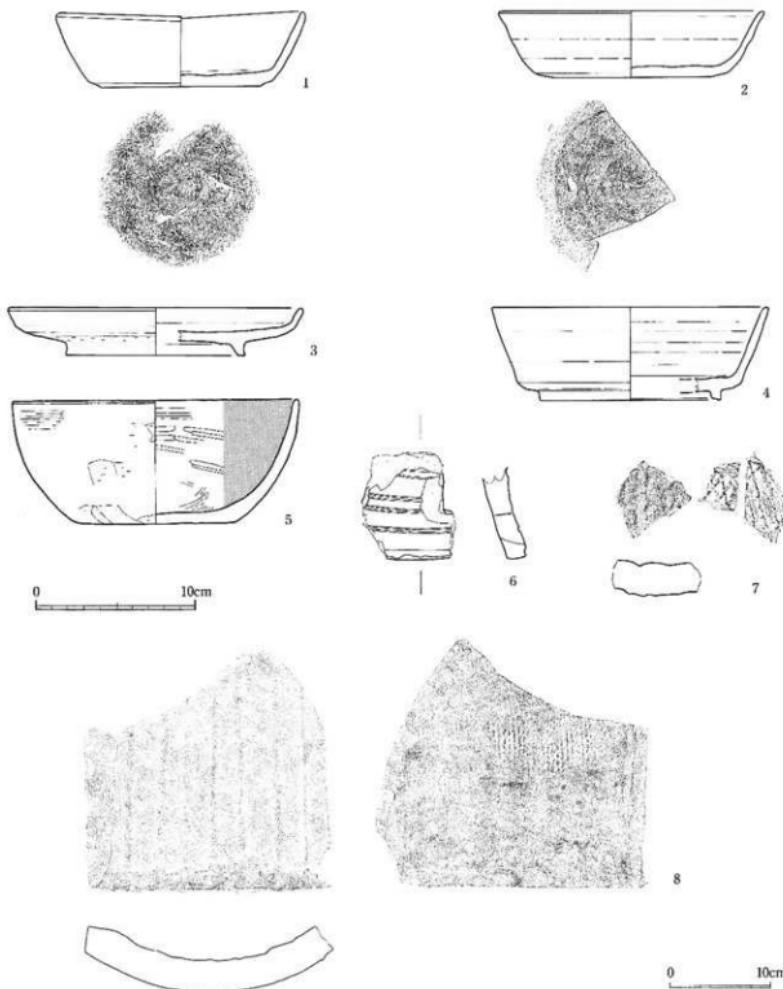
両側に拳手の円礪を並べた石組溝跡で、総長29.5m以上で更に南北に延びている。上幅92～148cmの布掘り状の掘え方の中に直径15cm程の扁平な河原石を敷き詰めて底面としている。底面敷石の残存幅は良好な部分で66cmで



第88図 II-B期 主要構造配置図



第89図 SD1600、SX1616A・B・C 平・断面図



回数 番号	資料 番号	種別	器形	出土場所	法線 (cm)	外周調査	内面調査	曲芳	測量 次年 回数
1	K-378	鉢	环	SX1616C	1a底面	深さ46、口徑156、底径100 内縁部・全体ロクロナガ、底部凹凸ヘラケズリ	ロクロナガ	H 1b	107 750
2	B-379	破壊器	环	SX1616C	1b底面	底高41、口径165、底径95 内縁部・全体ロクロナガ、底部手筋ヘラケズリ	ロクロナガ	H 1b	107 750
3	B-377	瓦芯形	高台付环	SX1616C	底面	基高3、口径184、底径156 内縁部・全体ロクロナガ、全体凹凸ヘラズリ、底部ロクロナガ	ロクロナガ	H 1	107 750
4	H-380	瓦芯形	高台付环	SX1616B	底面	基高3、口径172、底径120 ロクロナガ	ロクロナガ	H 1	107 750
5	C-772	上部器	环	SX1616C	奥面	基高7、口径165、底径95 内縁部ロコナガ、全体・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	H 1	107 750
6	H-381	内側壁		SX1616C	残存高7	ロクロナガ、底縫	ロクロナガ	H 1	107 750
7	G-68	瓦	平瓦	SX1616C	裏面	裏高5、底大巾5.5 内縁部・全体ロクロナガ	内面布目刷	H 1	107 750
8	G-68	瓦	平瓦	SX1616C	裏面	裏高5.24、底大巾2.8 内縁部ロコナガ	内面布目刷	H 1	107 750

第90図 SX1616A・B・C 出土遺物

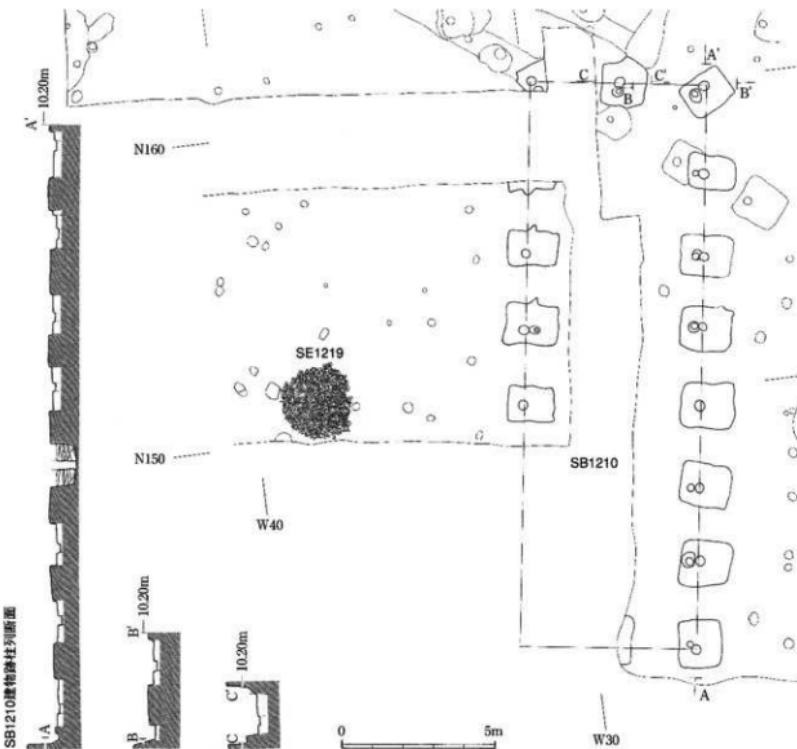
ある。側壁の部分で底面に敷かれた石よりも大きめな河原石を用いられているところがあり、8~10cm立ち上がっている(写真図版412)。方向は据え方の東辺でN-1°-Eである。調査区内では北から南に緩やかに傾斜しており、底面の比高差は15cm程度である。据え方の底面はやや凹凸があり、東辺では深くなっている。深さは6~10cm程度であるが、一部に20cm以上になる所がある。壁は西辺では緩やかに立ち上がるが、東辺ではほぼ垂直となる。

遺物は底面より小片の須恵器E-385甕、斜格子叩きの平瓦G-70(写真図版751)、土器器C-775壺が出土している。SB1605建物跡を切り、SD1571溝跡に切られている。

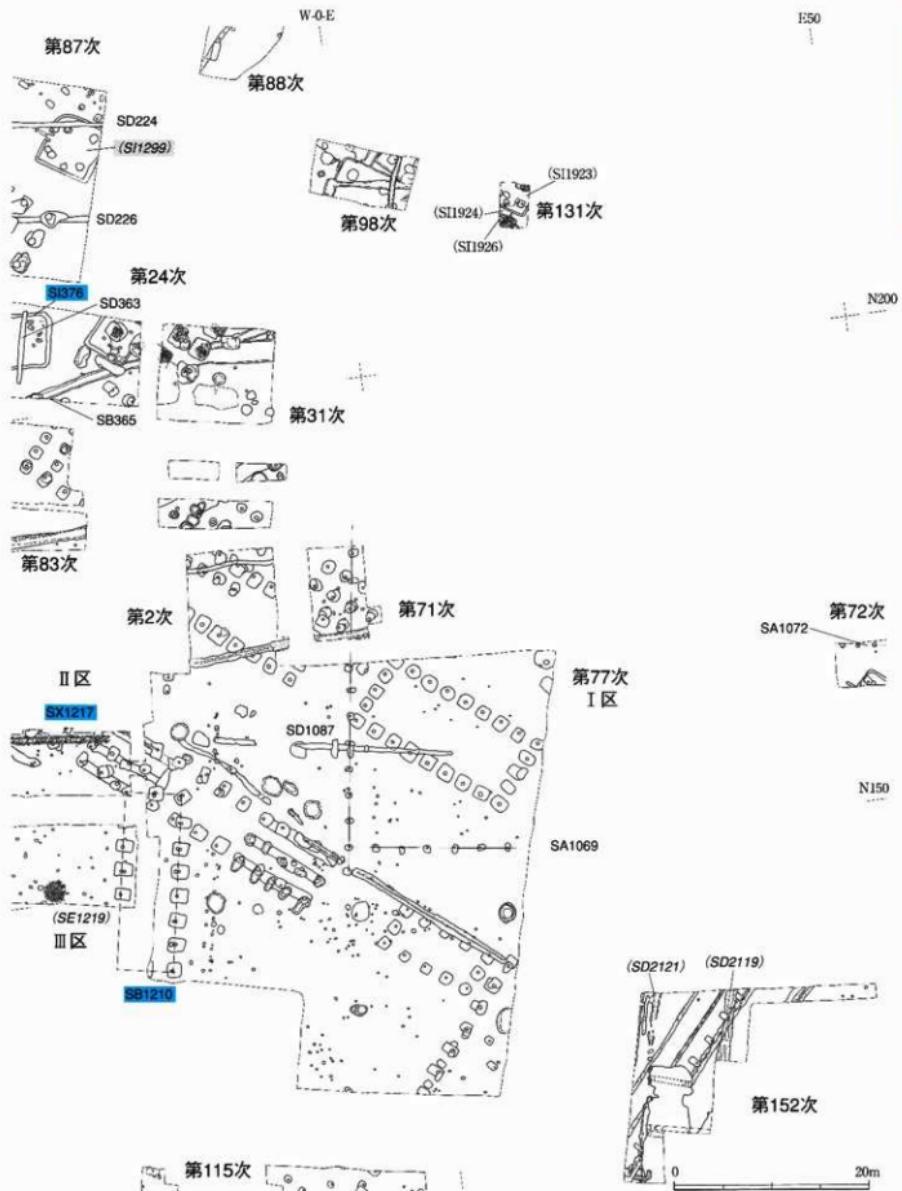
SB1210建物跡 (第77次・第87、91、92回)

桁行7間、総長18.3m(柱間寸法236~294cm、平均262cm)、梁行2間、総長5.6m(柱間寸法280~282cm、平均281cm)の南北棟建物跡で、桁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺108~184cmの隅丸方形及び隅丸長方形で、深さは86cmである。柱痕跡は直径28~35cmである。一部の柱穴に柱痕跡の内側に東柱痕跡が認められる。直径35~50cmで不整円形の小規模な掘り方で、直径15~25cmの柱痕跡である。なおこの東柱痕跡は掘り方や痕跡自体が検出されない柱穴もあり、設置された際の底面標高にやや違いがあると考えられる。

SB1215・1218建物跡を切っている。



第91図 SB1210 平・断面図



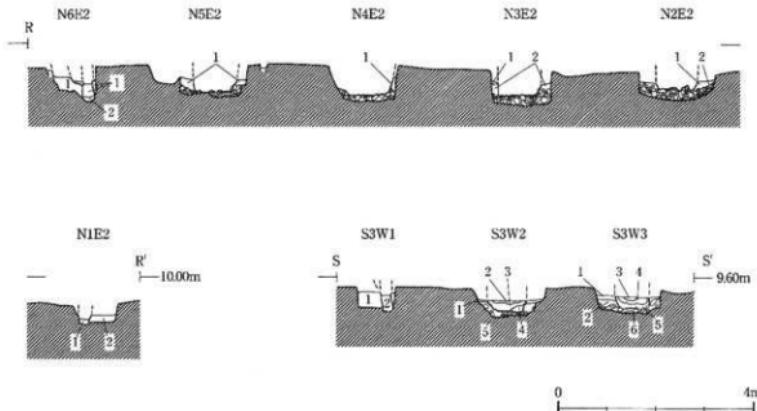
第92図 方四町Ⅱ期官衙中央北部2

SB1680建物跡（第115次・第87、94図）

桁行5間、総長14.68m（柱間寸法248～337cm、内部の平均327cm、外周の平均256cm）、梁行5間、総長12.96m（柱間寸法243～272cm、平均257cm）の南北棟の純柱建物跡で、桁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は建物を外周する廟ふうの柱穴に対し、建物内部には大型の柱穴が配置されている。外周する柱穴は一辺58～127cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径18～26cmである。建物内部の柱穴は一辺127～200cmの隅丸長方形もしくは隅丸長方形で、柱痕跡は直径72～96cmである。掘り方に浅いテラス状の張り出しが認められる。また建物内部の柱穴掘り方底面には拳大の河原石が3～4段にわたって敷き詰められている。柱穴の深さは70cmである。柱穴掘り方に抜き取り穴が伴っている箇所がある。

遺物は掘り方埋土中より土師器、須恵器片が出土している他に、N3W3柱穴掘り方より長さ2.5cm、厚さ1.4cmのK-211水晶片が出土している。

SA774柱列、SB775建物跡を切っている。



A区 SB1680 R-N			C区 SB1680 S-S'			
遺物名	位置	土色	性	層	参考	
N6E2				S3W1		
掘り方 1	I 10YR4/4 棕色	シルト質粘土	褐色色をまだらに含む	掘り方 1	I 10YR4/4 棕色	
柱穴	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト		柱穴 2	I 10YR3/2 黄褐色	
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色十を含む			
柱痕	= 2 10YR6/2 黄褐色	粘土	明黄褐色土を多少含む	掘り方 1	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	
掘り方	I 10YR4/3 棕色	粘土	にぶい黄褐色	柱穴 1	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十を多量に含む	柱穴 2	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	
N5E2				S3W2		
掘り方 1	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色十シルトを多量に含む	掘り方 3	I 10YR3/1 黄褐色	
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土		柱痕 4	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	
柱痕	I 10YR4/6 棕色	シルト			柱穴 1	I 10YR5/4 にぶい黄褐色
N4E2				S3W3		
掘り方 1	I 10YR4/6 棕色	シルト		掘り方 5	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	
柱痕	I 10YR4/3 棕色	シルト質粘土		柱穴 1	I 10YR4/4 棕色	
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十質粘土シルトを含む	柱穴 2	I 10YR3/2 黄褐色	
N3E2				S3W1		
掘り方 1	I 10YR4/3 棕色	シルト質粘土	褐色色十を多量に含む	柱痕 3	I 10YR4/6 棕色	
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十シルトを含む	柱痕 4	I 10YR4/6 棕色	
柱痕	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色色十土質粘土シルトを含む	柱穴 1	I 10YR4/4 棕色	
柱痕	I 10YR4/4 棕色	シルト質粘土	褐色色十を含む	柱穴 2	I 10YR2/2 黄褐色	
N2E2				S3W2		
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十を多量に含む	柱痕 3	I 10YR4/6 棕色	
柱痕	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色色十を多量に含む	柱痕 4	I 10YR4/6 棕色	
N1E2				S3W3		
柱痕	I 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十を含む	柱穴 1	I 10YR6/4 にぶい黄褐色	
柱痕	I 10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色色十を部分的に含む			

第93図 SB1680 断面図

第77次



(SD2121)

(SD2119)

第115次

A区

B区

D区

E区

SB1880

C区

SB1690

N100

第57次

(SD740)
(SA1740)
(SD758)

第122次
(SB1795)

G区

SI1980
SI1970
SI1965
SI1975
N30
第142次

SA1945 第140次

SI1940
SA1960

第20次

SB208

W50



W-E

0

20m

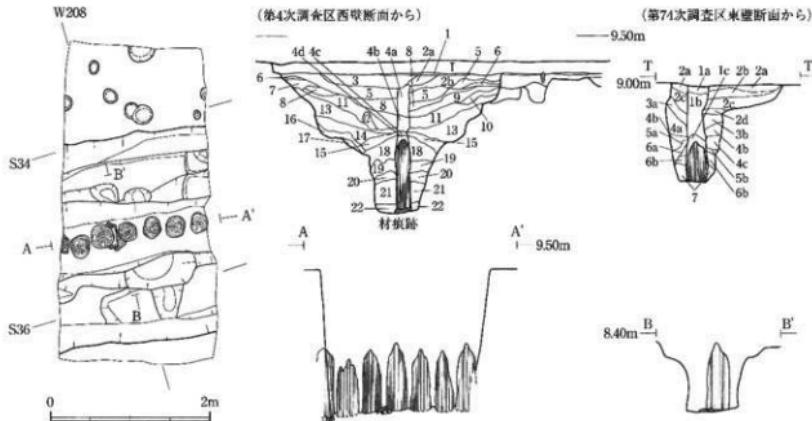
第94図 方四町Ⅱ期官衙中枢部 2

[方四町Ⅱ期官衙南辺]

SA33材木列 (第4、7、8、9、42、43、56、101(J区)、121次・第95、96、97回)

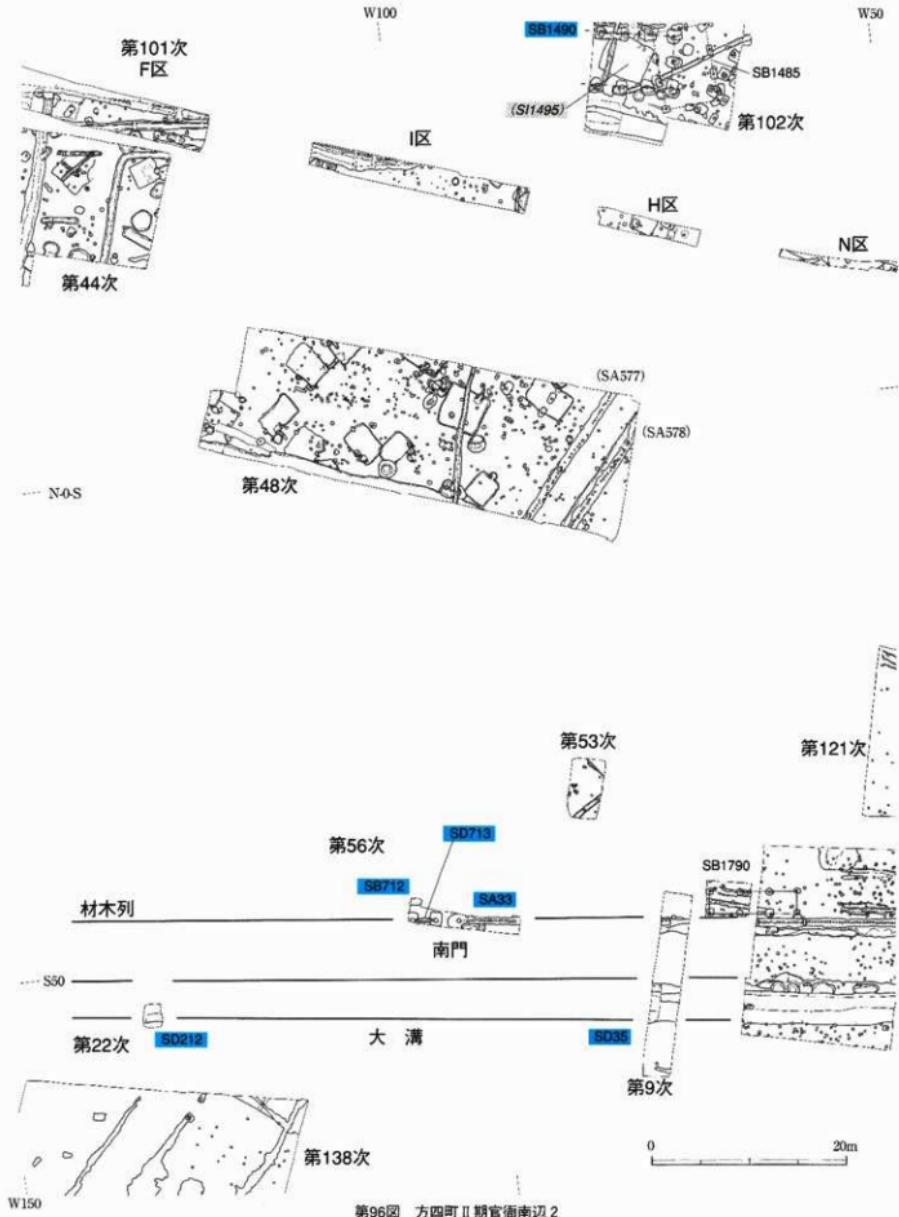
直徑5~30cmの丸材をE→S(真東西)方向に密接して立て並べている。材はクリ材で表面を手斧で面取りし、形状と太さを揃え、掘り方の中に設置している。材の一部には設置された底面付近にイカダ穴が削り貫かれているものがある(第43次)。また設置の際に基礎板の板材を敷いている箇所がある(第4次)。なおSB712南門付近では、丸材の中に少量の角材が含まれていた(第56次)。材は木質が55~110cmほど残存し、掘り方上面まで伸びている。木質が朽ちて土質化した箇所においては、本来の柱痕跡よりも細くなっている(第121次)。

掘り方は上幅250cmで下部に向かって狭まっており、深さ80~100cmの所でやや平坦となり、そこから幅90cmとなつて壁が直立し、深さ90cm程度で底面となる。検出面からの深さは180cmとなっている(第4次)。南西コーナー付近では掘り方上部が削半されているため、上幅が110~150cmとなり、特に南側の壁のみが広がっている(第43次)。これは南辺中央部でも同様で、掘り方の北壁は直立気味となっているが、南壁は上部が広がっている(第121次)。

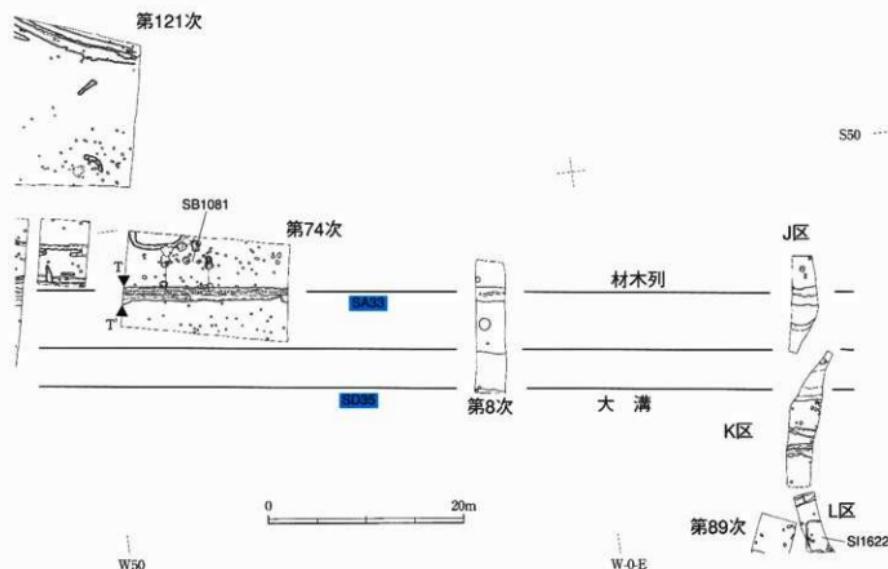
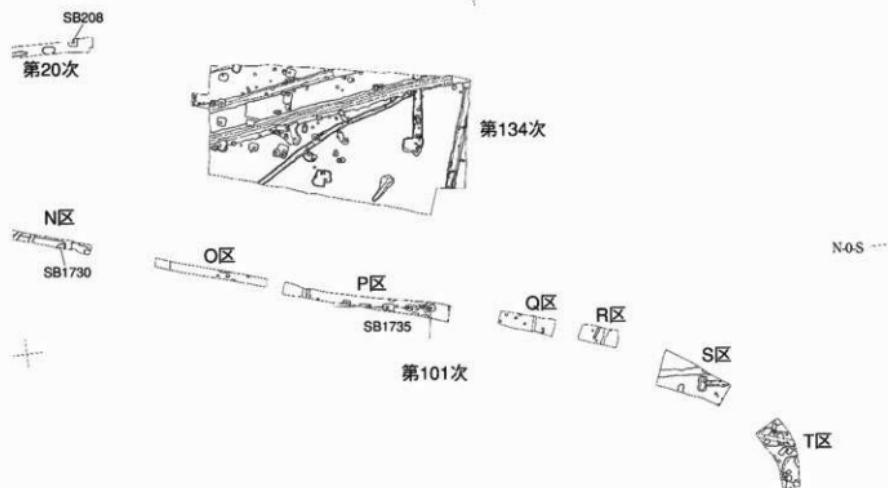


地名	土色	土性	審	層	上色	土性	備考	
第4次調査区西壁								
1 7.5Y5/1 黄褐色	粘土質シルト	柱旗跡		18	ZSY6/2 黄褐色	シルト	柱旗跡	
2 10YR5/6 黄褐色	砂土質粘土	掘り方壁上		19	5GY6/2 オリーブ灰褐色	粘土	柱旗跡	
2a 10YR4/2 細い黄褐色	粘土質シルト			20	3GY6/1 オリーブ灰褐色	粘土	柱旗跡	
2b 10YR4/2 黄褐色	粘土質シルト			21	5GY4/1 茶オリーブ灰褐色	粘土	柱旗跡	
3 7.5Y5/2 灰色	砂土質シルト			22	5GY4/1 茶オリーブ灰褐色	粘土	柱旗跡	
4a 10YR5/3 灰褐色	粘土質シルト	柱旗跡		第74次調査区東壁				
4b 10YR4/2 灰褐色	粘土			1a	10YR4/1 灰褐色	シルト	柱旗跡	
4c 10YR4/2 黄褐色	粘土			1b	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	柱旗跡	
5d 10YR4/1 黄褐色	粘土			1c	10YR3/3 灰褐色	粘土	柱旗跡	
5 10YR3/2 暗褐色	粘土質シルト	掘り方壁上		2a	10YR6/3 黄褐色	シルト	柱旗跡	
6 10YR6/6 明褐色	シルト質粘土			2b	10YR6/6 明黄色	シルト	柱旗跡	
7 10YR3/2 暗褐色	砂土質シルト			2c	10YR7/6 明黃褐色	シルト	柱旗跡	
8 10YR5/4 細い黄褐色	粘土質シルト			2d	10YR7/6 灰褐色	シルト	柱旗跡	
9 10YK3/2 黑褐色	粘土質シルト			3a	10YR4/4 灰色	シルト	柱旗跡	
10 10YR4/4 灰色	粘土質シルト			3b	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	柱旗跡	
11 10YR5/2 黑褐色	シルト質粘土			4a	10YR5/4 細い黄褐色	粘土質シルト	柱旗跡	
12 10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土			4c	10YR6/6 明褐色	粘土質シルト	柱旗跡	
13 10YR5/4 細い黄褐色	シルト質粘土			5a	10YR5/6 黄褐色	粘土	柱旗跡	
14 10YR6/3 黄褐色	シルト質粘土			5b	10YR6/2 灰褐色	粘土	柱旗跡	
15 10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	強化供の堆積が有る・掘り方壁上		6b	10YR6/2 灰褐色	粘土	柱旗跡	
16 10YR7/4 細い黄褐色	シルト質粘土			7	5GY6/1 オリーブ灰褐色	粘土	柱旗跡	
17 10YR4/3 細い黄褐色	シルト質粘土							

第95回 SA33 平・断面図



第96図 方四町Ⅱ期官衙南辺2



第97図 方四町Ⅱ期官衙南辺 3

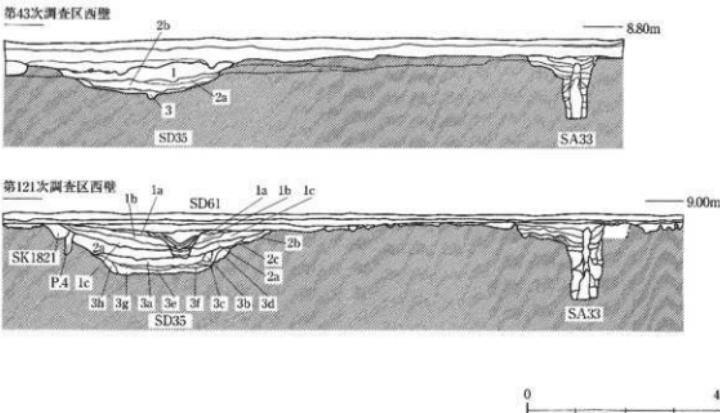
SD35溝跡—大溝—（第4、7、8、9、22、42、43、101（J区）、121次・第96、97図）

上幅250~300cm、下幅120~230cm、深さ60cm程度で、断面形は扁平な逆台形である。方向はほぼ真東西方向で、溝の中央から北の材木列までの距離は8.6~9mである。方四町Ⅱ期官衙の南西辺では溝の上幅が広がり、4~5mとなっている。溝の屈曲部やその周辺から多数の土器が出土している（第7、43次）。また最上層に灰白色火山灰を含んでいる（第42、43次）。

遺物は堆積土中から土師器では内面黒色処理され、体部外面に段あるいは後のある壺が多く、器形の細部には体部から口縁部にかけて直線的に外傾する土師器C-489、495、481、497壺（第101図1、4、6、9）や、丸みを持つ土師器C-498、488、479壺（第100図9、15、第101図3）など多様性がある。また器高が高く口径が広い塊形を呈する土師器C-494、493壺、484甕（第101図10、12、13）も存在する。さらにこれらの壺類とは特徴を異にする薄手で、口縁部から底部にかけて半球形の壺類がある。内面は黒色処理されずナデが主で、外表面はヘラケズリが施される土師器C-7・5・12・10・500壺（第99図8、9、10、12、第100図11）である。その他に変や高壺が出土し、高壺は脚部が有窓の土師器C-23・14・499高壺（第99図15、16、第101図14）と、窓のない土師器C-9・32~34高壺（第99図17、第100図3、2、1）がある。

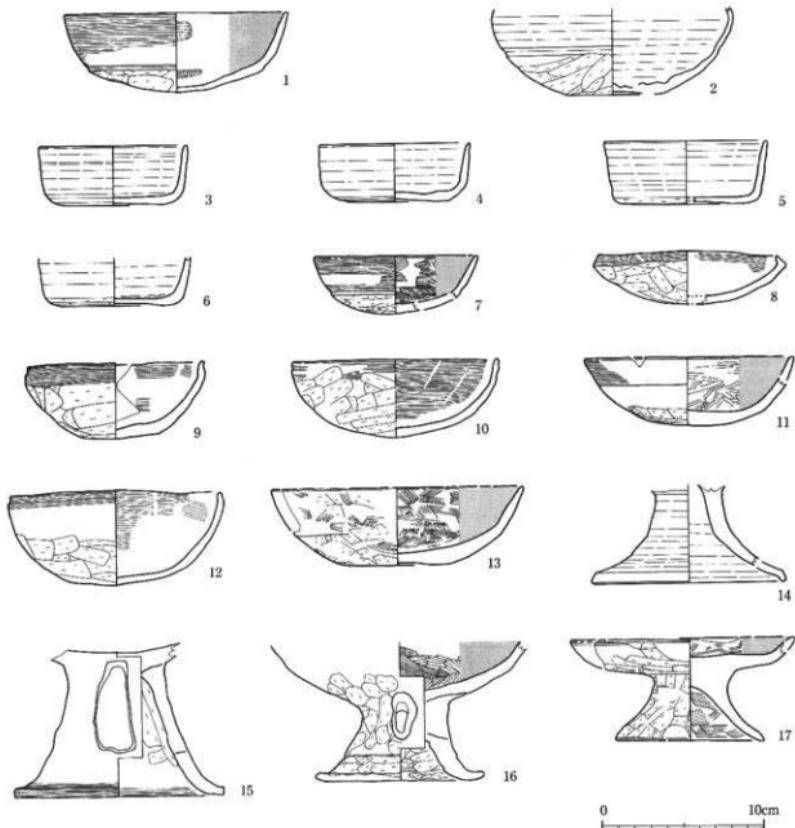
須恵器では平底で口縁部まで直立する小型の須恵器E-19・20・21・17壺（第99図3~6）と、体部中に段がある須恵器E-224、223壺（第100図13、16）とがある。また器高の比較的低い須恵器E-417高台壺（第102図9）や体部が球形の須恵器E-16・222甕（第100図4、第102図4）が出土している。瓦は、凸面は繩叩きで凹面に模骨痕跡が観察されるG-22平瓦（第102図5）が出土している。

SB31・34・1279建物跡、SD36溝跡、SK489土坑などを切っている。



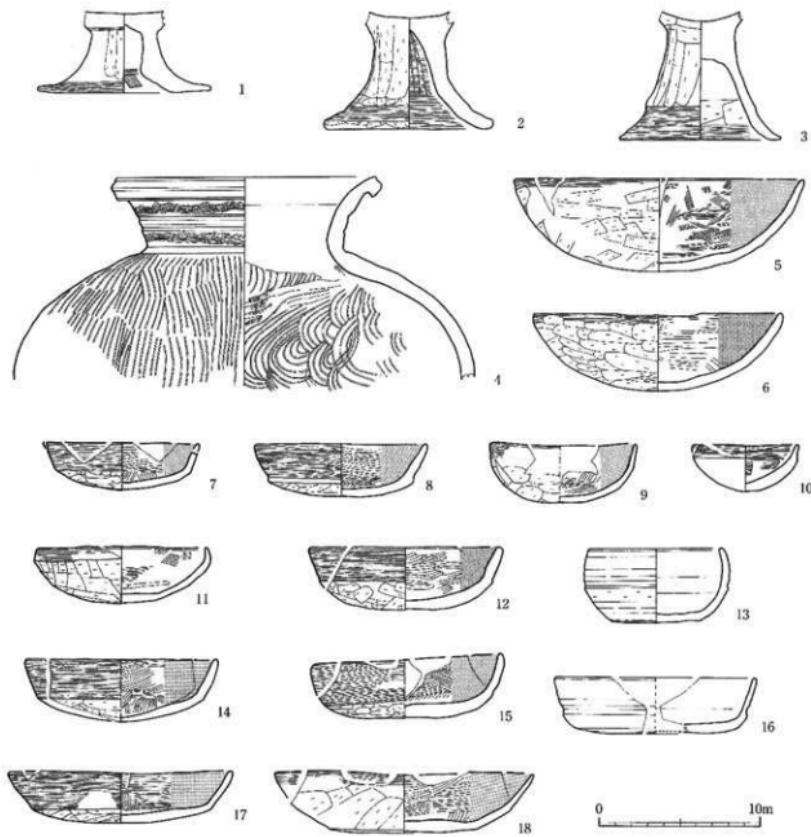
遺構名	部位	土色	土性	備考	遺構名	部位	土色	土性	備考
第43次 調査区	1	10YR5-1	褐色	シルト質粘土。遺物、粘土粒、木片を多く含む	SD35	2c	10YR6-2	灰黃褐色	粘土質シルトを斑状に含む
	2a	7.5YR4-1	褐色	シルト質粘土		3a	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 繊維を多く含む
	2b	2.5YR4-1	褐色	シルト質粘土		3b	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 黄褐色シルトをわずかに含む
SD35	3	10YR6-1	褐色	シルト質粘土	SD35	3c	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 黄褐色シルトをブロックで多く含む
	1a	10YR4-3	灰褐色	シルト 解石質土		3d	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 黄褐色シルトをブロックで多く含む
	1b	10YR4-3	灰褐色	シルト 炭化物粒をわずかに含む		3e	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 炭化物粒を斑状に含む
第121次 調査区	1c	10YR4-3	灰褐色	シルト 炭化物粒をまばらに少量含む	SD35	3f	10YR6-2	灰黃褐色	粘土 にふく、灰褐色上を斑状に含む
	2a	10YR5-2	灰褐色	粘土質シルト 酸化鉄を斑状に含む		3g	10YR7-2	灰黃褐色	粘土 炭化物を含む
	2b	10YR5-2	灰褐色	粘土質シルトを多く含む		3h	10YR7-2	灰黃褐色	粘土 酸化鉄を全体的に含む

第98図 SD35 断面図



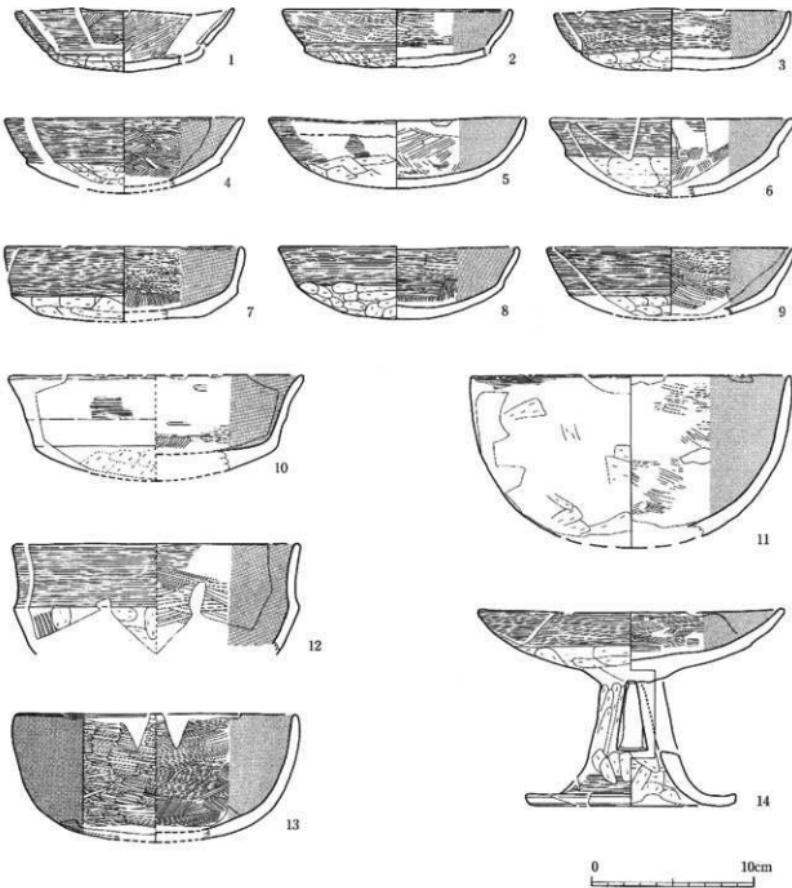
器名 番号	種別	器形	出土地点		法量(cm)	外側調整	内面調整	備考	調査 回数	写真 枚数
			出土場所	層位						
1 C-29	土師器	环	SD35	2	器高4.9 口徑14.0	口縁落・唇部・ヨコナギ、底部手前ハラケツリ	ハラミガキ、黒色施漬	A B3	4	648
2 E-7	土師器	环	SD35	2	残存高5.4	各部凹凸ハラケツリ、底部手前ハラケツリ	ロクロナゲ	A B3	4	648
3 E-19	土師器	环	SD35	1	器高3.7 口徑6.3 底径6.0	ヨコナギ、底部施漬ハラケツリ→側面ハラケツリ	ロクロナゲ	B 2	7	648
4 E-30	土師器	环	SD35	1	器高3.7 口徑6.4 底径5.2	ヨコナギ、底部施漬ハラケツリ→側面ハラケツリ	ロクロナゲ	B 2	7	648
5 E-31	土師器	环	SD35	1	器高3.7 口徑10.0 施漬付	ヨコナギ、底部施漬ハラケツリ→側面ハラケツリ	ロクロナゲ	B 2	7	648
6 E-17	土師器	环	SD35	1	残存高3.0 施漬付G3	ヨコナギ、底部施漬ハラケツリ→側面ハラケツリ	ロクロナゲ	B 2	7	648
7 C-36	土師器	环	SD35	1	器高3.6 口徑10.2	口縁落ヨコナギ、底部・施漬付手前ハラケツリ	ヨコナゲ→ハラミガキ、黒色施漬	A B3	7	648
8 C-7	土師器	环	SD35	1	器高3.3 口徑10.9	口縫落ヨコナギ、底部・底部ハラケツリ	ナゲ	B V	7	648
9 C-5	土師器	环	SD35	3	器高4.7 口徑11.0	口縫落ヨコナギ、底部・底部ハラケツリ	ナゲ	B II	7	648
10 C-12	土師器	环	SD35	1	器高4.8 口徑12.6	口縫落ヨコナギ、底部・底部ハラケツリ	ナゲ	B IV	7	648
11 C-13	土師器	环	SD35	1	器高4.2 口徑12.6	口縫落ヨコナギハラケツリ、底部ハラケツリ	ハラミガキ、黒色施漬	A B2	7	648
12 C-14	土師器	环	SD35	2	器高4.9 口徑13.1	口縫落ヨコナギ、底部・底部ハラケツリ	ナゲ	B I	7	648
13 C-6	土師器	环	SD35	3	器高4.6 口徑13.6 施漬付(63)	手前ハラケツリ→ハラミガキ	ハラミガキ	A V	7	648
14 E-8	土師器	高环	SD35	1	残存高4.3 脊部付1.9	ヨコナギ	ロクロナゲ	B II	7	648
15 C-23	土師器	高环	SD35	1	残存高4.5 施漬付13.0	転落ヨコナギ、輪底付あり	ハラミガキ、施漬ヨコナギ、底部施漬ハラケツリ	I	7	648
16 C-14	土師器	高环	SD35	1	残存高4.5 施漬付10.5	ハラケツリ、底部下に棘あり	ハラケツリ、底部ハラミガキ→ハラケツリ、施漬ヨコナギ	B III	7	648
17 C-9	土師器	高环	SD35	1	器高5.3 口徑13.8 施漬付9.2	SD35ヨコナギ、底部・脇部ハラケツリ	ヨコナゲ・外部ハラミガキ、黒色施漬	B I	7	648

第99図 SD35 出土遺物 (1)



図版 番号	器種 分類	種別	器形	出土地点		法量 (cm)	外観調査	内部調査	著者	調査 実数	写真 用紙	
				田中遺跡	層位							
1	C-34	土器部	高环	SD35	1	直径2.9 高さ0.5	脚付円筒形	脚付ハラケシリ、ヨコナデ	脚付ハラナデ、耳部ハラミガキ、黒色處理	田中 1	7	
2	C-33	土器部	高环	SD35	1	直径2.73 高さ0.4	脚付円筒形	脚付ハラナデ・脚部ハラケシリ	脚付ハラナデ、脚部ヨコナデ	田中 1	7	
3	C-32	土器部	高环	SD35	1	直径2.80 高さ0.5	脚付円筒形	脚付ハラケシリ、脚部ヨコナデ	脚付ハラケシリ、脚部ヨコナデ	田中 1	7	
4	E-16	粗面器	環	SD35	1	口径15.9	口縁直状横縫、底付平底丸き目	底付直角突起	11	7		
5	C-10	土器部	环	SD35	2	直径3.5 口径2.78	口縁直状ヨコナデ、底付・外輪部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AN 1a	22	668	
6	C-47	土器部	环	SD35	2	直径4.8 口径1.54	口縁直状ヨコナデ・底付・外輪部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AN 1a	42	697	
7	C-48	土器部	环	SD35	1	直径2.9 口径(0.9)	口縁直状ヨコナデ、底付、外輪部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AN 2	43	700	
8	C-50	土器部	环	SD35	2	直径3.3 口径3.07	口縁直状ヨコナデ、底付、外輪部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AN 3	43	700	
9	C-49B	土器部	环	SD35	1	直径3.7 口径(0.0)	口縁直状ヨコナデ、底付、外輪部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AN 1a	43	700	
10	C-49C	土器部	环	SD35	1	直径2.9 口径6.7	口縁直状ヨコナデ、底付ハラケシリ	口縁直状ヨコナデ、外輪部ハラケシリ	CV	43	700	
11	C-50D	土器部	环	SD35	2	直径3.5 口径12.3	口縁直状ヨコナデ、底付、外輪部ハラケシリ	ナゲ・底付ハラキ	BV	43	700	
12	C-482	土器部	环	SD35	1	直径2.9 口径(1.20)	口縁直状ヨコナデ、底付、底部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AB 2	43	700	
13	E-234	須志器	环	SD35	1	直径4.6 口径6.2 高さ5.6	0.020mm 厚底ハラケシリ、底付・底部ハラケシリ	クロタロナ	1	43	700	
14	C-49E	土器部	环	SD35	1	直径2.85 口径(1.19)	口縁直状ヨコナデ、底付・底部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AB 3	43	700	
15	C-48A	土器部	环	SD35	1	直径4.6 口径(1.16)	口縁直状ヨコナデ、底付、底部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AB 2	43	700	
16	E-225	須志器	环	SD35	1	直径4.63 口径(12.20)	底付軋ハラケシリ	クロタロナ	11b	43	700	
17	C-50F	土器部	环	SD35	1	直径3.3 口径(3.7)	口縁直状ヨコナデ、底付、底部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AB 3	43	700	
18	C-48D	土器部	环	SD35	1	直径4.6 口径(16.0)	口縁直状ヨコナデ、底付、底部ハラケシリ	ハラミガキ、黒色處理	AV	43	700	

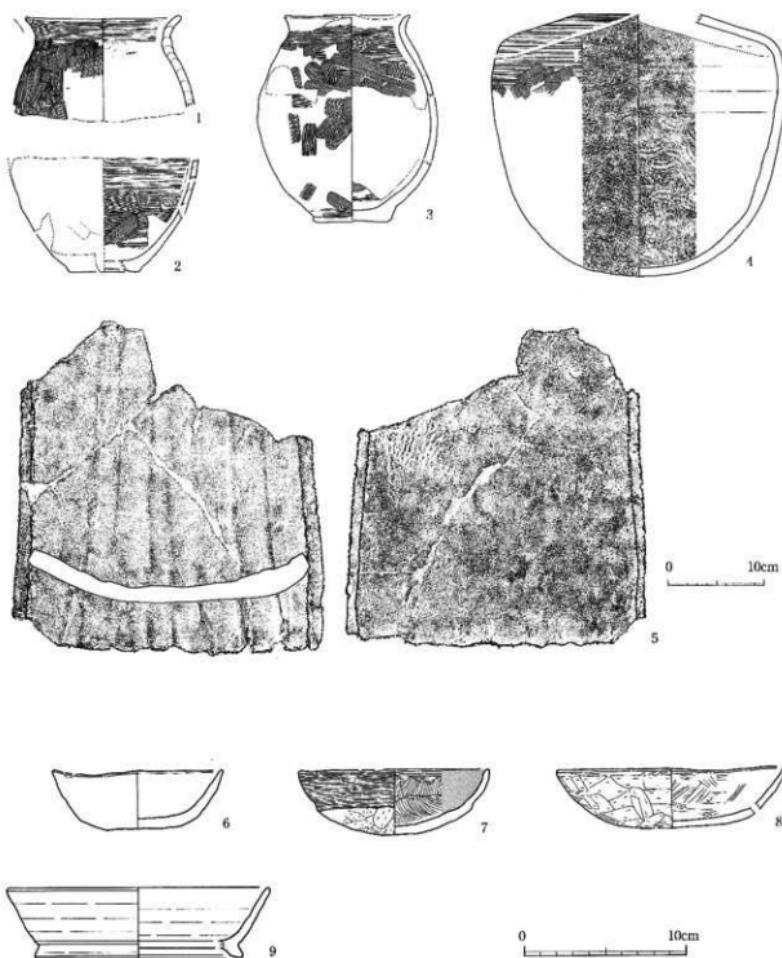
第100図 SD35 出土遺物 (2)



第101図 SD35 出土遺物 (3)

圖號 番号	器物 器物	種類 形	出土地点 出土場所	層位 層位	法蓋 cm)	外表面觀 外表面観	内面觀 内面観	備考 備考	器主 器主	年代 年数
1 C-489	土師器	环	SD35	1	直径13.8	口縁13.7 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 3	43	700
2 C-485	土師器	环	SD35	1	直径3.6	口径14.3 口縁ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 2	43	700
3 C-479	土師器	环	SD35	1	直径3.3	口径14.6 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 2	43	700
4 C-493	土師器	环	SD35	1	直径4.7	口径14.9 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 2	43	700
5 C-487	土師器	环	SD35	1	直径4.4	口径16.0 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A' N 1a	43	700
6 C-481	土師器	环	SD35	1	直径4.9	口径15.2 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 2	43	700
7 C-491	土師器	环	SD35	1	直径4.6	口径14.6 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 3	43	700
8 C-502	土師器	环	SD35	2	直径4.0	口径13.0 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 1	43	700
9 C-497	土師器	环	SD35	1	直径4.2	口径15.4 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 3	43	700
10 C-494	土師器	环	SD35	1	直径4.5	口径18.4 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A 1	43	699
11 C-496	土師器	环	SD35	1	直径4.0	口径19.8 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A N 2a	43	699
12 C-493	土師器	环	SD35	1	直径4.6	口径18.5 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A B 2	43	699
13 C-484	土師器	环	SD35	1	直径4.8	口径19.4 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	A' N 2b	43	699
14 C-499	土師器	盘环	SD38	1	直径12.3	口径19.3 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、 白色処理	1	43	699

0 10cm



第102図 SD35 出土遺物 (4)

番号	鉢縁 番号	種別	形態	出土地点 (市十道場 地層)	法業 (cm)	外面測量	内面測量	備考	測量 次段	写真 次段
1	C-508	土器部	甕	SD35	1 市十道場 領域 (146.3)	U縁鉢ヨコナギ、体部ヘラナギ	U縁鉢ヨコナギ	B.I	43	
2	C-509	土器部	甕	SD35	1 市十道場 119 領域72	摩滅	体部・底部ヘラナギ	B	43	
3	C-506	土器部	甕	SD35	1 市十道場 117 口径13.2 領域7.9	U縁鉢ヨコナギ、底部ヘラナギ、底面水痕	U縁鉢ヨコナギ、体部ヘラナギか	B.I	43	699
4	E-222	灰窯部	甕	SD35	1 市十道場85	体部粘子叩き目	体部粘子叩き目	A	43	
5	G-22	瓦	平瓦	SD35	1 直径34.4 断人幅32.5	凸面縫合き→ヘラケズリ	凸面縫合	A	43	699
6	C-832	土器部	甕	SD35	3 市十道場 37 口径 (10.6)	摩滅	摩滅	A.B.Iia	121	755
7	C-828	土器部	甕	SD35	1 市十道場 41 口径11.9	U縁鉢ヨコナギ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色處理	A.B.I	121	755
8	C-829	土器部	甕	SD35	1 市十道場 37 口径14.2	体部・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	B.V	121	755
9	E-417	灰窯部	粘子叩き	SD35	1 市十道場 口径38.0 底径32.0	セクリヤナギ	セクリヤナギ	I	121	

SB712建物跡—南門一（第56次・第96、103図）

柱穴を4つ検出し、各々に直径50cm程のクリ材が残存していた。棟通と推定される柱列の方向は、E—0°—S（真東西）方向である。柱間寸法は240cmの等間隔となっている。調査区内で最も東の柱穴掘り方は直径160cmの円形で、深さは185cmである。柱材は掘り方の基底から150cm上方まで木質が残っている。この柱の位置から東は掘り方の幅が狭まり、SA33材木列（方四町Ⅱ期官衙南辺）の掘り方となっている。

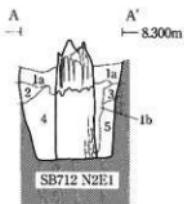
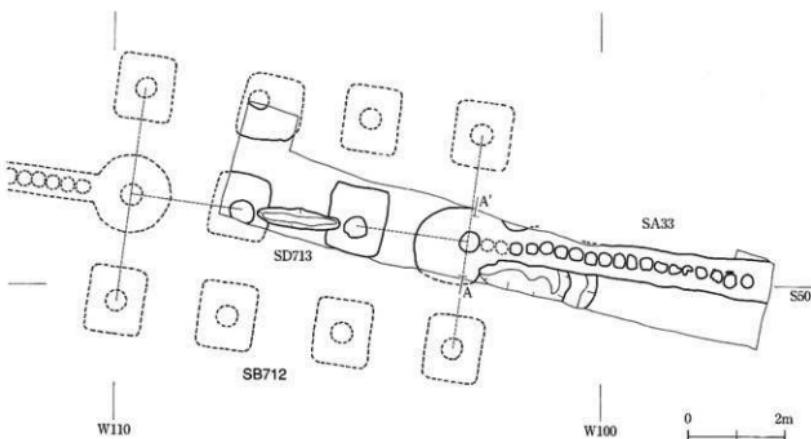
方四町Ⅱ期官衙の中央に位置し、塀が取り付いている状況からは八脚門かそれ以上の規模の門跡と考えられる。

SD713溝跡（第56次・第96、103図）

上幅25~40cm、下幅10~15cm、深さ20~25cmで、断面形は逆台形の溝跡である。長さは170cmで、方向は真東西方向である。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

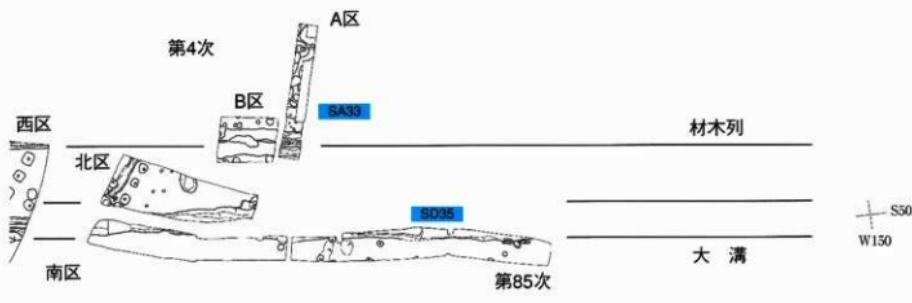
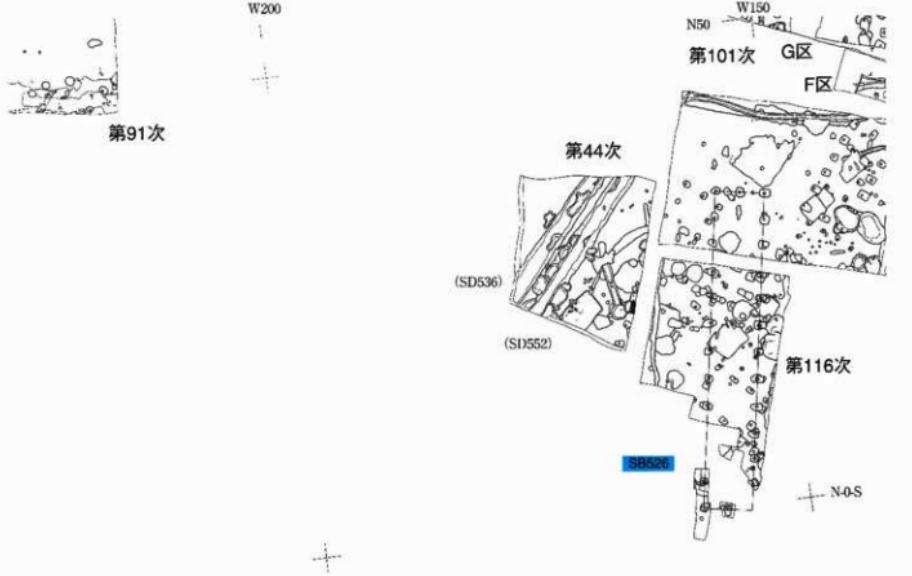
SB712建物跡（南門）の柱間と柱間を結ぶ位置にあたり、八脚門とした場合には通間口にあたる。

この溝跡はSB712建物跡を切っている。



層位	土色	土性	備考
SB712 N2E1			
1a	10GY5/4 緩灰色	粘土	掘り方盤上
1b	10GY3/3 缓和灰色	粘土	*
2	10RG5/1 青灰土色	シルト質砂	*
3	10GY5/1 緩灰色	粘土	*
4	10GY5/1 緩灰色	粘土	*
5	10GY5/1 緩灰色	粘土質シルト	

第103図 SB712 平・断面図



第104図 方四町Ⅱ期官衙南辺1-2

0 20m

第138次

SB526A・B建物跡（第44、116次・第104回）

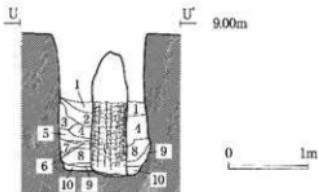
桁行12間、総長33m（柱間寸法246～292cm）、梁行2間、総長4.9m（柱間寸法243～249cm）の南北棟の建物跡で、方向は西桁行でN-2°-Eである。柱穴は一辺55～100cmの隅丸方形か不整形で、深さは50～70cm、柱痕跡は直径15～28cmである。同位置で同規模の建て替えがある。一部に抜き取り穴の伴っている柱穴がある。

SB51建物跡（第7、151次・第105、107回）

南北2間、総長4.2m（柱間寸法210cm）、東西2間以上、総長4.4m以上（柱間寸法210cm）の建物跡で、南北柱列の方向はN-0°-E（真北）である。柱穴は一辺100～130cmのやや歪んだ方形で、深さは180cm程度である。柱材は良好に遺存しており、芯材を用いた直径45～50cmの丸柱である。柱の表面は手斧により7～9cmの幅で面取りされている。

南より2列目の中央柱穴より北柱列の中央柱穴に向かって掘り方が延び連結し、さらに材が検出されたSA65材木列の掘り方が北に延びている。それぞれの部位で埋土に差異がないため、建物と材木列が同時に構築されたと考えられる。

第7次調査を実施した時点では、2間×2間の縦柱建物跡を見ていたが、第151次調査で新たに発見された西より3列目の柱穴列には、いずれの柱穴にもSA33材木列（方四町Ⅱ期官衙南辺）が接続していないことが明らかになった。方四町Ⅱ期官衙西辺となるSA65材木列のSB51建物跡との接続の仕方を見ると、南辺でも同様の接続の仕方が想定される。よってこの建物跡が東西2間以上で、その東端の南より2列目の柱穴に南辺となるSA33材木列が接続していると想定される。



第105回 SB51 断面図

編号	上色	土性	備考
1	75GY4/1 姫路灰色	シルト質粘土	
2	10GY4/1 姫路灰色	シルト質粘土	
3	10Y4/1 灰色	シルト質粘土	
4	75Y4/1 黒色	シルト質粘土	墨西色粘土をブロック状に含む
5	25GY3/1 オリーブ灰	砂礫質粘土	
6	75Z4/1 黑色	シルト質粘土	
7	75GY3/1 姫路灰色	シルト質粘土	
8	10GY3/1 緑色	シルト質粘土	
9	10GY4/1 姫路灰色	鶴山疊層土	
10	10GY4/1 姫路灰色	シルト質粘土	しまり強くや硬い

SD53溝跡（第7次・第107回）

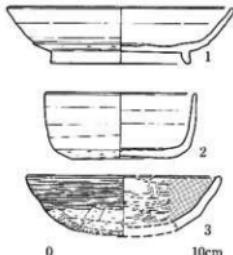
上幅47～63cm、底面幅18～32cm、深さ48～56cmで、断面形はV字形の溝跡である。壁はほぼ直線的に立ち上がり、底面は平坦である。方向は西半部でE-2°-Sであるが、東半部ではE-25°-S方向へ蛇行する。検出した総長は8.5mである。堆積土は4層で、灰黄褐色のシルト質粘土が主体である。

堆積上の第1層中から器窓の低い須恵器E-10高台付坏（第106図1）、平底で口縁部まで直立する小型の須恵器E-18坏（第106図2）、その他堆積土中から小振りで内面黒色処理された土師器C-25坏（第106図3）、須恵器E-11高坏などが出土している。

この溝跡はSD35・52溝跡を切っている。

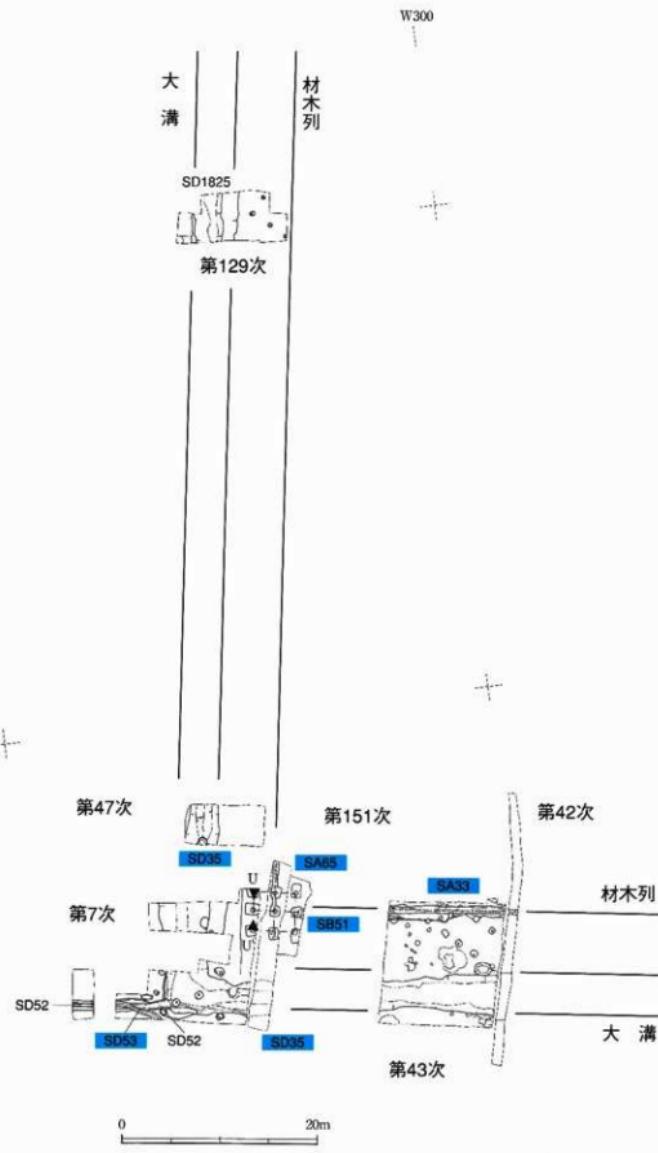
SA65材木列（第7、155次・第107回）

直径20～30cmの丸材をN-0°-E（真南北）方向に密接して立て並べている。材はクリ材で形状と太さは方四町Ⅱ期官衙の南辺であるSA33材木列と同様である。掘り方の上幅は50～58cmである（第7次）。



1. E-10 高台付坏（写真図版649）
2. E-18 坏（　　）
3. C-25 坏（　　）

第106回 SD53 出土遺物



第107図 方四町Ⅱ期官衙南西辺1



第108図 方四町Ⅱ期官衙南辺1-1

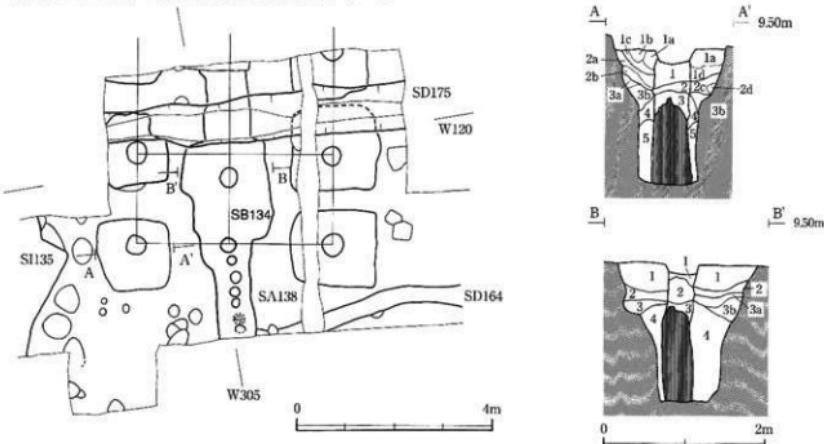
[方四町Ⅱ期官衙西辺]

SB134建物跡（第16次・第109、110図）

東西2間、総長4m（柱間寸法180~205cm）、南北2間あるいはそれ以上、総長4m以上（柱間寸法140~230cm）の建物跡で、南北柱列の方向はN=0°—E（真北）である。柱穴は一辺140~180cmのやや歪んだ方形で、深さは190cm程度である。柱材は良好に遺存しており、直径40~50cmの丸柱である。

棟通りの柱穴掘り方は、南北に延びるSA65材木列の掘り方が連続しながら広がっている。最も掘り方が広がった箇所での深さは、170cm程度である。調査区北壁際でも掘り方が広がり始めることから、建物跡の柱穴となることが想定される。

遺物は柱穴の掘り方埋土中より、漆の入れられた須恵器E-88壺（第112図1）、平瓶あるいは壺の一部と見られる須恵器E-89壺縁部の破片（第112図2）が出土している。

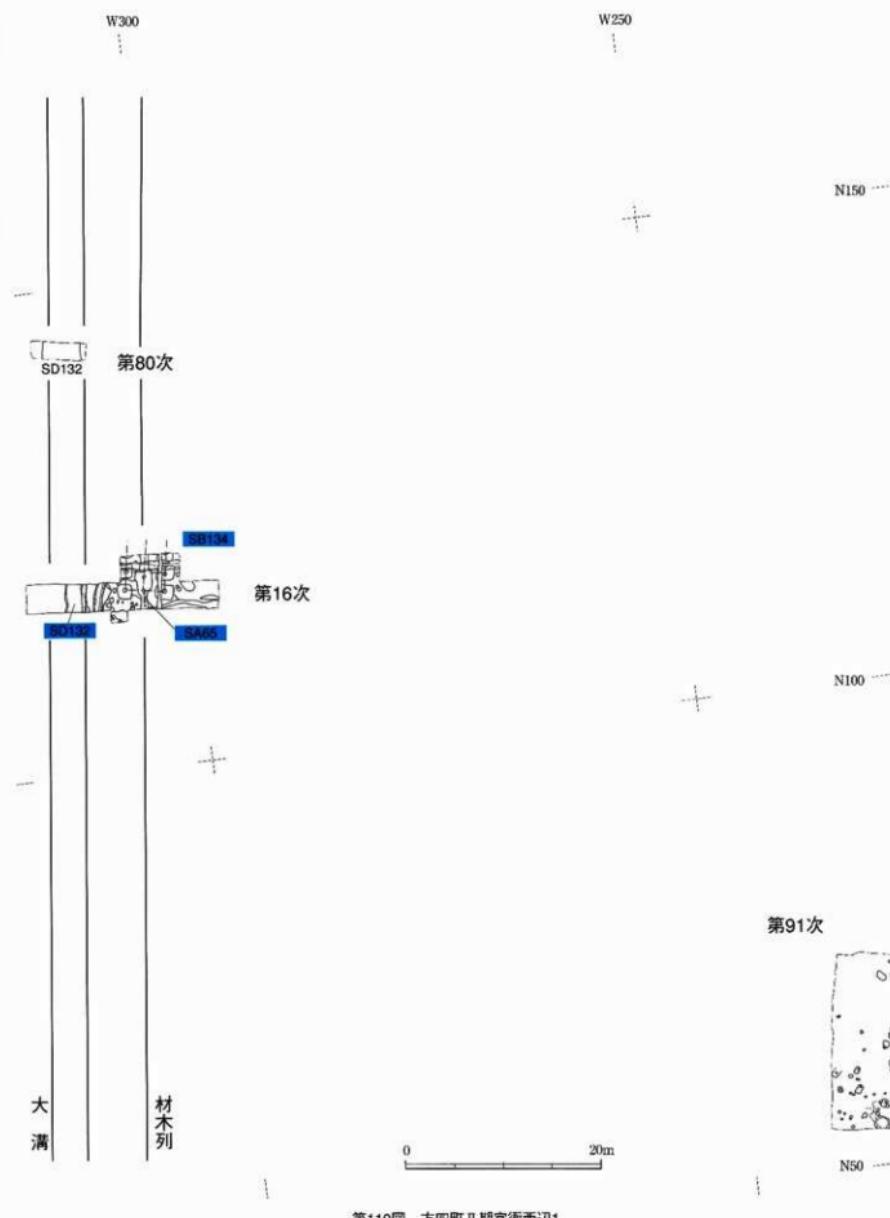


遺物名	層位	土色	上性	備考	遺物名	層位	土色	上性	備考
SB134	SIW1 A-A'				SB134	SZW2 (SA138埋土中に)			
1	10YR8/2	黒褐色	粘土質シルト		1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト		2	25T3/1	黒褐色	粘土	
3	23Y4/1	黒褐色	粘土		3	25T2/1	黒色	粘土	
1a	10YR2/4	暗褐色	粘土質シルト	に古い地盤を含む	1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	
1b	10YR2/4	暗褐色	粘土質シルト		2	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト	
1c	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	斑状褐色土、浅黄色土をもじらむ	3a	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	
1d	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	斑状褐色土、浅黄色土をもじらむ	3b	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	
2a	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	青褐色土、基盤色土をブロック状に含む	4	25Y2/1	黑色	粘土質シルト	
2b	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	青褐色土、基盤色土をブロック状に含む					
2c	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	青褐色土をブロック状に含む					
2d	10YR6/6	明褐色	粘土質シルト						
3a	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト						
3b	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト						
4	10YR3/1	黒褐色	粘土						
5	10G74/1	鮮紅灰褐色	粘土						

第109図 SB134 平・断面図

SD132溝跡—大溝—（第16、80次・第110図）

上幅6m以上、下幅6m以上、深さ60cm程度で、溝の東壁際のみを検出した。方向はほぼ真南北方向である。溝の最深部が同調査区内で検出したSA138材木列から7.2~7.3m離れ、平行していることから、方四町Ⅱ期官衙西辺部の外郭大溝と見られる。



第110図 方四町Ⅱ期官衙西辺1

W200

W150

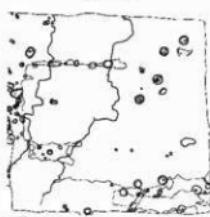
第40次

--- N150

第5次

--- N100

第91次



E区

D区

第101次

第110次

SA1660

(SD1629)

(SK1654)

(SD1647)

SD1628

SD1673

SA730

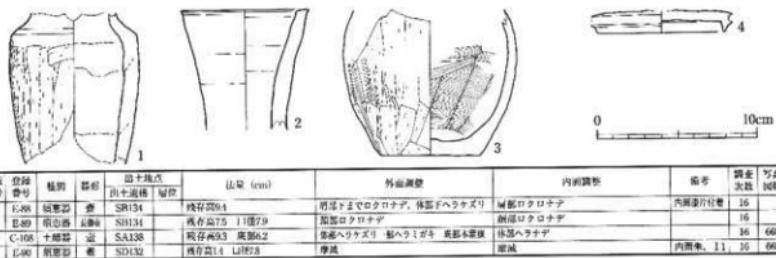
SB1650

SB1448
SB1465
G区
A-B-C

0 20m

第44次

第111図 方四町Ⅱ期官衙西部1



第112図 第16次調査区出土遺物

遺物は堆積土中から天井部が平坦で内面にカエリのある須恵器E-90壺(第112図4)が出土している。この蓋の内面には朱が付着している。

SA65材木列一方四町Ⅱ期官衙西邊(第16次・第110図)

直径30cmの丸材をN-E(真南北)方向に密接して立て並べている。材はクリ材で形状と太さは方四町Ⅱ期官衙の南邊であるSA33材木列と同様である。掘り方の上幅は70~80cmで、深さは遺構検出面から110~130cmである。

遺物は掘り方埋土中より漆の入れられた土器C-108壺の破片(第112図3)が出土している。

SA138建物跡の棟通りの掘り方と連結している。

[方四町Ⅱ期官衙南東辺]

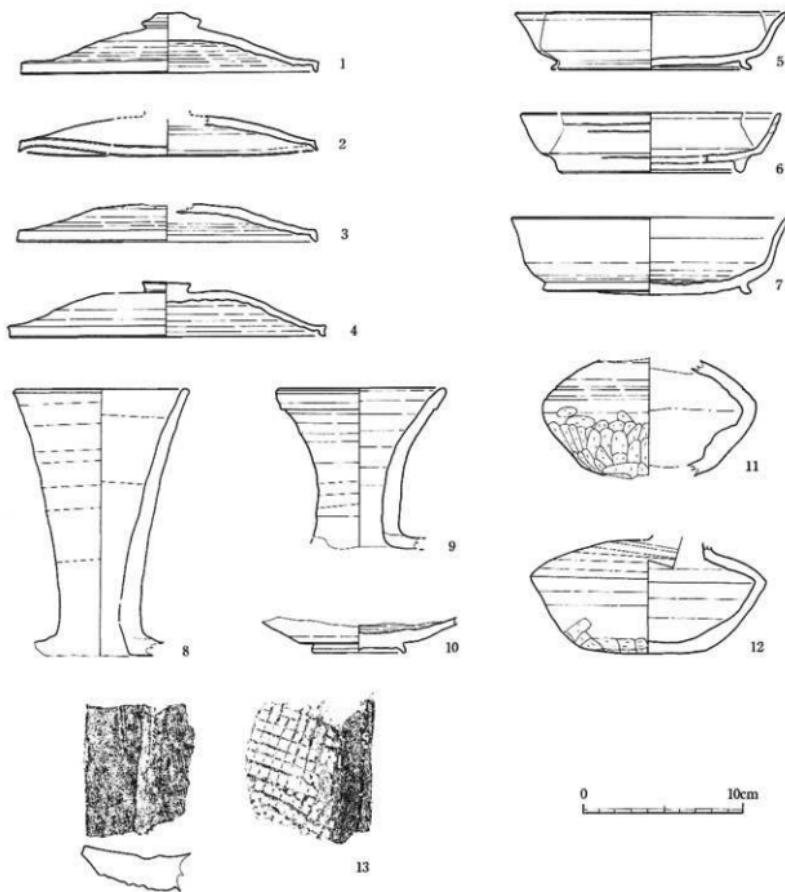
昭和54年度調査について

この発掘調査は昭和54年(1979)に遺跡北東部において、宅地造成の計画があり、事前に試掘調査を行ったところ掘立柱建物跡の一部が発見され、初めての発掘調査となったものである。発見された遺構は掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡2棟、土坑16、焼上遺構4、溝跡18など、官衙の発見につながった。また出土した遺物の中に圓鏡(第228図)や、凸面が平行叩きによる重弧文軒平瓦(第226図6)や竹状模骨痕跡を残す重弧文軒平瓦(第226図5)、白土仕上げの壁材(図版31)など特異なものが含まれていた。国庫補助事業による発掘調査以前の調査であるが、遺構と遺物の一部について取り上げた。

東区1号掘立柱建物跡(昭和54年度調査区・第116図)

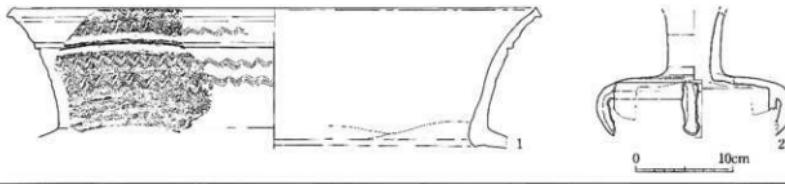
桁行5間、総長13.2m(柱間寸法248~280cm)、梁行2間、総長5.55m(柱間寸法172~195cm)の東西棟建物跡で、桁行の方向はE-1°-Nである。柱穴は一辺50~100cmの方形あるいは不整形で一定せず、深さは50cm前後である。柱痕跡は直径25cm程で、全てに抜き取り穴が伴っていた。抜き取り穴の埋土中に多量の焼土、炭化物が含まれていたことから、火災に遭っていると考えられる。

遺物は抜き取り穴の中から多量に出土している。特に須恵器片の出土量が多い。須恵器蓋はカエリのない口縁端部がL字形に屈曲する須恵器E-79-25・4・6・26壺(第113図1、2、3、4)である。口径が18.3~19.7cmで扁平な宝珠が付いている。高台付壺は高さが3.6~4.8cmあまりなく、須恵器E-79-24・3高台付壺(第113図5、7)の2点は口縁部にかけて外側にやや反っている。とくに須恵器E-79-3高台付壺は底部に回転ヘラケズリが施され、高台部より底部中央が張り出している。また大壺の破片で口縁部に5~6本の液状沈線が3段に通る須恵器E-79-19壺(第114図1)や、把手付きの須恵器E-79-22長頸壺(第114図2)、口縁部が欠損し算盤玉状の須恵器E-79-5平壺(第113図12)、同様の形状の須恵器E-79-1長頸壺(第113図11)、長頸壺のE-79-21・23口縁部(第113図8、9)などが出土している。



開拓 番号	番号	種類	跡形	出土地点	底径 (cm)	外側測量	内側測量	備考	測量 次数	写真 枚数
1	E725	柱礎部	基	第11号段 底面穴	直径3.7 口徑18.3	ロクロナデ、天井部斜軸ヘラケズリ	ロクロナデ	II la	54年度	635
2	E741	柱礎部	基	第11号段 底面穴	残存高2.3 口径18.5	ロクロナデ、体部中段斜軸ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	635
3	E746	柱礎部	基	第11号段 底面穴	器高2.35 口径18.5	ロクロナデ、天井部ロフリナデ、基盤部ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	635
4	E735	柱礎部	基	第11号段 底面穴	器高2.4 口径18.7	ロクロナデ、天井部斜軸ヘラケズリ	ロクロナデ	II lb	54年度	635
5	E734	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.6 口径16.9 底径12.4	口縁部・両台座ロフリナデ、基盤部ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	635
6	E748	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.7 口径16.2 底径11.2	口縁部・両台座ロフリナデ、底盤部ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	635
7	E763	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.7 口径17.2 底径12.9	口縁部・両台座ロフリナデ、底盤部ヘラケズリ	ロクロナデ	II 2	54年度	635
8	E731	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.5 口径16.9 底径15.3 口径10.9	口縁部、底部ロフリナデ	ロクロナデ	II 1	54年度	636
9	E722	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.6 口径16.7 底径15.2 口径10.2	口縁部・両台座ロフリナデ、口縁部凹み	ロクロナデ	II 1	54年度	636
10	E737	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.7 口径17.2 底径15.8	多面ロフリナデ、底盤部ヘラケズリロフリナデ	ロクロナデ	II 1	54年度	636
11	E741	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.5 口径16.9 底径15.3 口径7.5	体部上ロフリナデ、体部下干切込ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	636
12	E735	柱礎部	柱脚	第11号段 底面穴	器高2.7 口径17.0 底径15.3 口径7.3	体部上ロフリナデ、底盤部持ち込ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1	54年度	636
13	G12	柱	平丸	第11号段 底面穴	器高6.8 最大幅6.2	凸面部ヘラナデ、様子吹き	凸面部ヘラナデ、ヘラケズリ	四面吹き	54年度	636

第113図 東区1号掘立柱建物跡出土遺物 (1)



第114図 東区1号掘立柱建物跡出土遺物 (2)

SD73溝跡一大溝一（第11次・第115、116図）

上幅280~300cm、下幅100~120cm、深さ80~85cmで、断面形は逆台形である。方向は真南北方向で、溝の中央から西の材木列まで8.5mである。堆積土中の2・3層、検出された溝跡の深度の中位付近に灰白色火山灰が斑点状に含まれている。

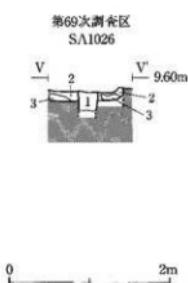
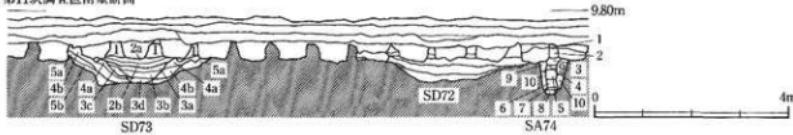
規模や堆積土の状況、材木列との位置関係から、方四町Ⅱ期官衙外郭東辺の大溝である。

SA74材木列一方四町Ⅱ期官衙東辺一（第11、18、69、105、117次・第115、116、117図）

直径20~25cm程の丸材をN=0°~E、あるいはN=1°~W方向に密接して立て並べている。設置の際に礎板状の板材を敷いている箇所がある（第11次）。材は木質が南部では残存しているが、方四町Ⅱ期官衙南辺ほど良好ではない。

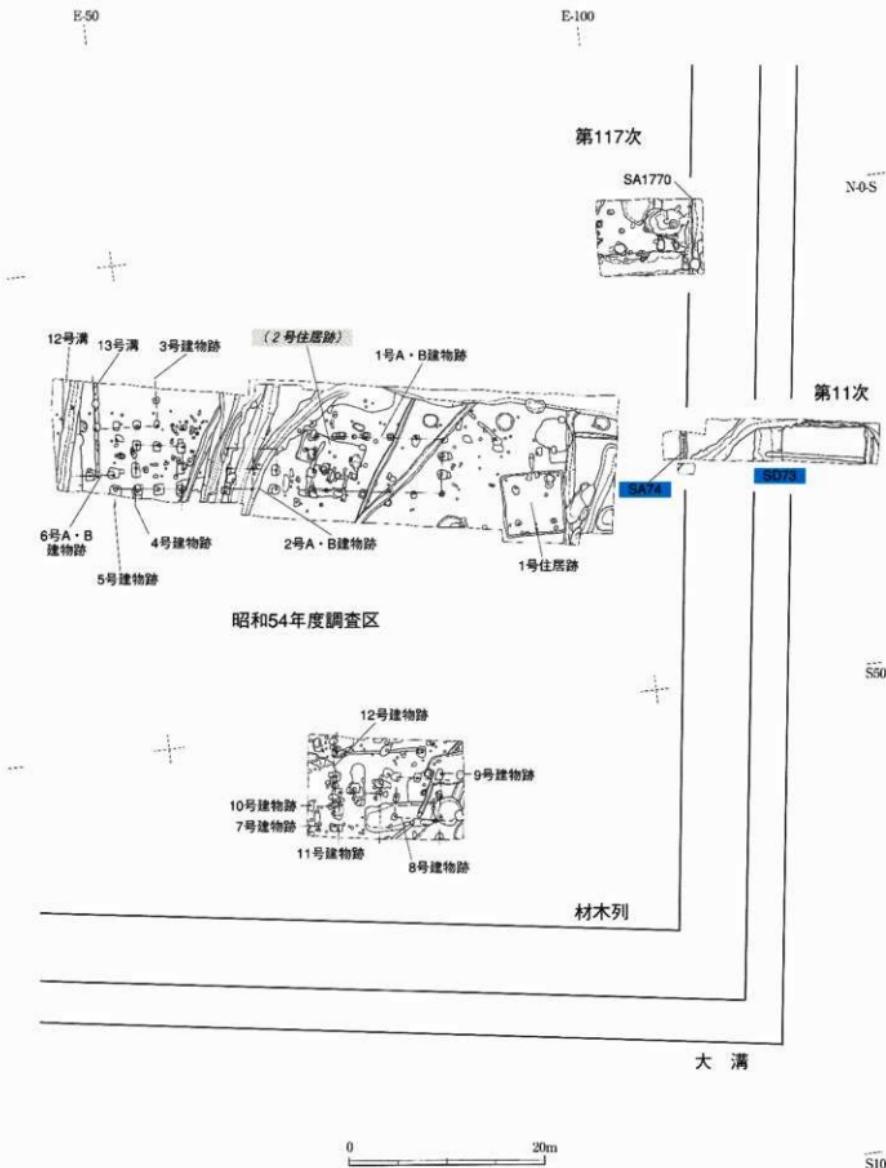
掘り方は上幅35~80cmで下部に向かって狭まっており、深さ35~130cmで底面となる。残存状況が良好な箇所では上幅120~240cmで、中段において幅が狭まり60~110cmとなっている。

第115次調査区南壁断面

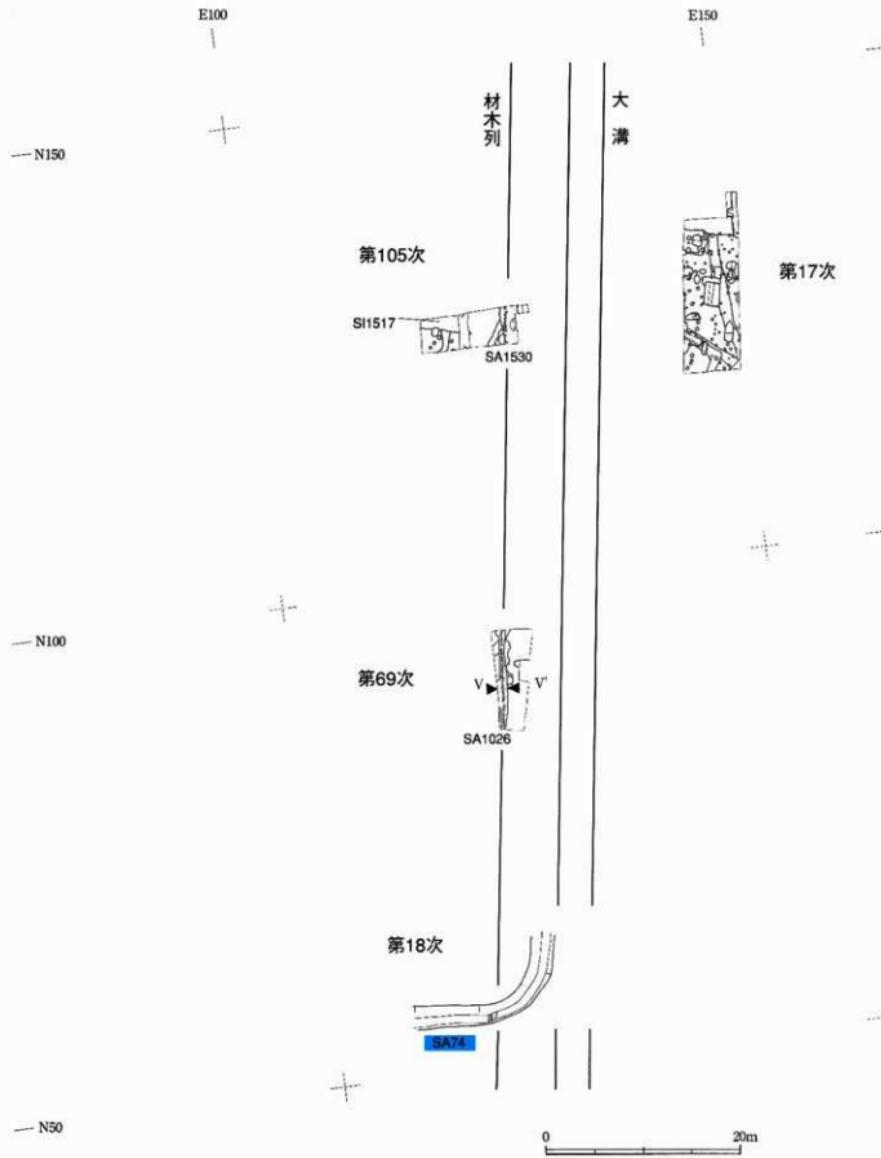


層位名	層位	上色	上性	備考
SD73	1	10YR3/2 黒褐色	新土質シルト	
	2a	10YR3/1 黒褐色	新土質シルト	灰白色火山灰を含む
	2b	10YR3/1 黒褐色	新土質シルト	
	3a	10YR3/2 黒褐色	新土質シルト	灰白色火山灰を含む
	3b	10YR3/1 黒褐色	新土質シルト	
	3c	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	
	4b	10YR4/1 黄褐色	粘土	
	4a	10YR4/1 棕褐色	新土質シルト	
	4b	10YR7/2 明灰褐色	新土質シルト	
	5a	10YR6/4 に赤い黄褐色	新土質シルト	
	5b	10YR5/1 黄褐色	シルト質粘土	
SA74	1	10YR4/2 黑褐色	シルト	電気上が全層に通じに入る
	2	10YR5/2 黑褐色	シルト	黒褐色土質中に混じに入る
	3	10YR4/2 に赤い褐色	地十質シルト	に赤い褐色色を含む部分にに入る
	4	10YR4/2 黑褐色	地十質シルト	黒褐色土質状に入れる
	5	7SYR3/2 黑褐色	地十質シルト	深褐色色を含むブロック状に入る
	6	7SYR3/2 黑褐色	地十質シルト	地十質シルトを少量化する
	7	7SYR3/2 黑褐色	粘土	褐色土質が侵入する
	8	7SYR3/1 黑褐色	シルト	
	9	2SYR3/1 黑褐色	新土質シルト	新土質シルトを含む
	10	10YR5/3 に赤い黄褐色	シルト	褐色シルトを含む
SA1026	1	10YR5/3 黑褐色	地十質シルト	
	2	10YR5/3 黑褐色	地十質シルト	
	3	10YR5/3 に赤い黄褐色	砂質シルト	

第115図 SA74、SD73 断面図



第116図 方四町Ⅱ期官衙南東辺1



第117図 方四町Ⅱ期官衙東辺1

[方四町Ⅱ期官衙北部]

SD385溝跡（第35次・第120図）

上幅70cm、下幅25~30cm、深さ25cm程度で、断面形は逆台形である。方向は真東西方向で、北に平行するSA386一本柱列までの距離は4.7~5mである。第35次調査区内では32mほど検出し、さらに東西に延びている。東の第61次調査区で検出されたSD798溝跡は、形状や位置からこのSD385溝跡の延長部と見られる。それを合わせると連続する総長は68.5mになり、さらに東西に延びるものと考えられる。

堆積土より土師器坏、高坏、壺片、須恵器壺、壺片が出土している。延長部と見られるSD798溝跡からは、内面にナデ調整の施された土師器C-602坏や退化した口縁部の須恵器E-271坏が出土している。

第35次調査区ではSB422・425・426・432建物跡を切っている。第61次調査区ではSI805竪穴住居跡を切っている。

SA386一本柱列（第35次・第120図）

掘り方が一辺90~130cmの不整形方形で、柱痕跡が直径20~24cmの柱穴による堀跡が検出された。方向はE-1°~N-6°で、柱間寸法は221~249cmである。第35次調査区内では30.2mほど検出し、さらに東西に延びている。東の第61次調査区で検出されたSA794一本柱列は、形状や位置からこのSA386一本柱列の延長部と見られる。それを合わせると連続する総長は69.4mになり、さらに東西に延びるものと考えられる。

遺物は掘り方中より、土師器の坏、高坏、壺片や、須恵器の坏、高坏、壺片が出土している。

SB425・432建物跡、SI443・444竪穴住居跡、SD445溝跡を切っている。

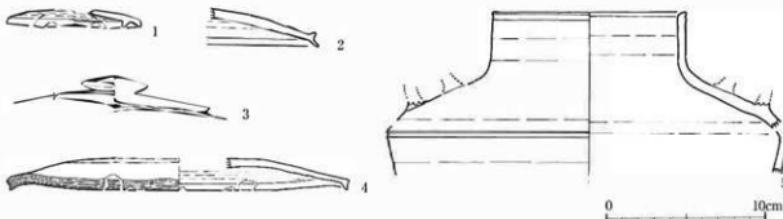
SI390竪穴住居跡（第35次・第120図）

南北6.1m、東西5.7m以上の方形で、東半部は調査区外に延び全容は明らかでない。削平のため壁は殆ど残っていない。床面もあまり明瞭ではないが、多量の炭化物、焼土が検出され、その中から土師器、須恵器片が出土した。

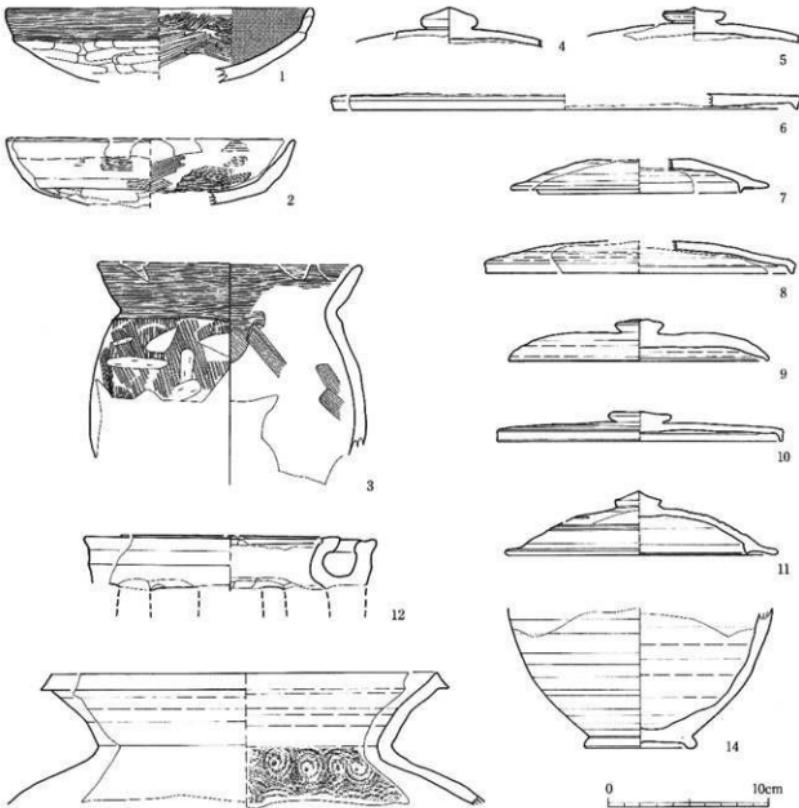
遺物は検出面上から内面黒色処理された土師器C-443坏(第119図1)、カエリのある須恵器E-191蓋(第118図1)、蓋の天井端部と内面のカエリがY字状に張り出すE-187蓋(第118図2)、口径のやや大きい須恵器E-201・204蓋(第118図3、4)、その他に2対以上の把手が付いた須恵器E-212蓋(第118図5)が出土している。そのうち須恵器E-201蓋には宝珠形のツマミが付いている。

床面と見られる炭化物の上面からは、再酸化を受け内面の黒色処理が観察されない土師器C-438坏(第119図2)、ハケメ調整の顯著な土師器C-440蓋(第119図3)の上半部片が出土している。須恵器蓋では、検出面上で出土した小振りで内面にカエリのある蓋類が含まれず、口径が大きいものとなる。須恵器E-200・218蓋(第119図9、10)のようにカエリのないものが多い。またカエリのあるものでもE-206蓋(第119図11)のように天井部が高く、口径の大きなもののみである。さらに特殊な形態をしたE-195円面鏡(第119図12)が出土している(註13)。この他に口頭部のみの須恵器E-211蓋(第119図13)や体部下半のみのE-210蓋(第119図14)が出土している。

SA475一本柱列、SI400・446竪穴住居跡を切り、SK396土坑に切られている。

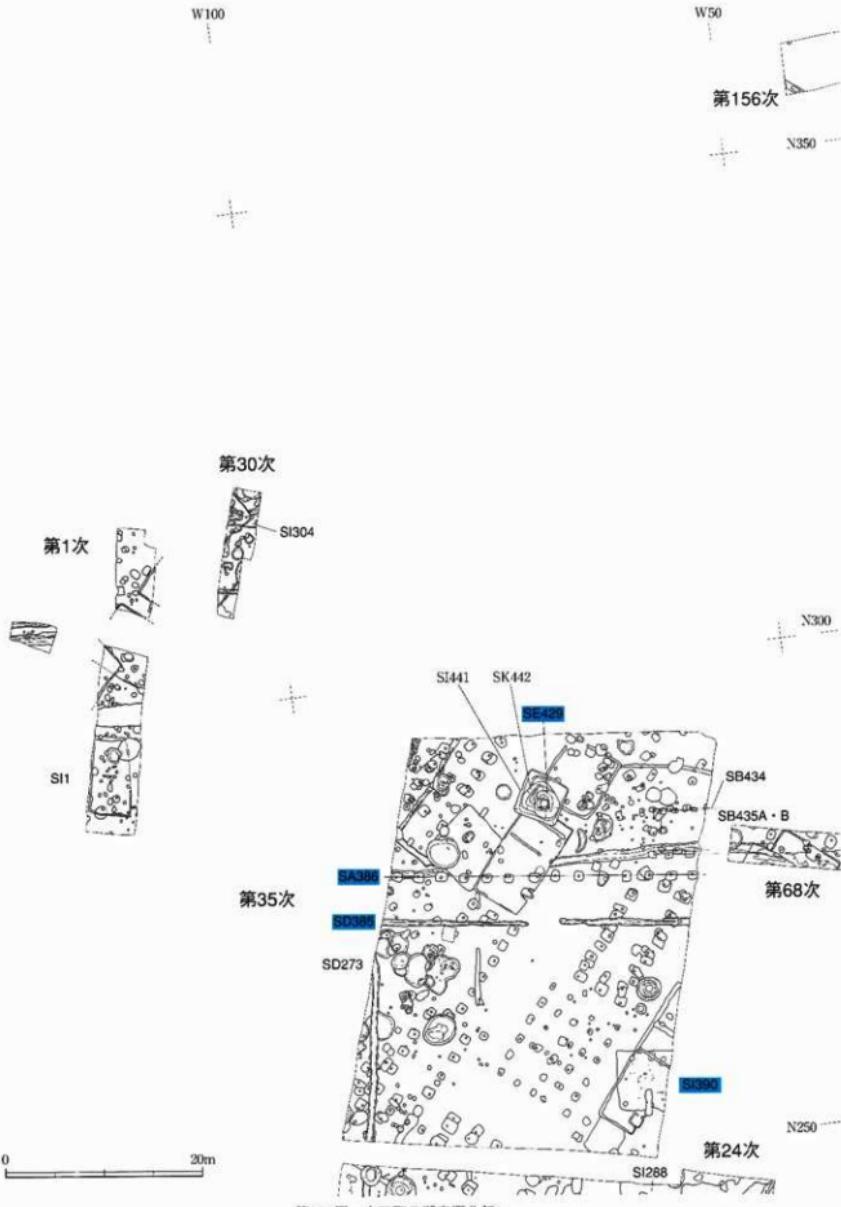


第118図 SI390 出土遺物 (1)



第119区 SI390 出土遺物(2)

出土地点 番号	種別	形態	出土地點 番号	測量(cm)	外面測量	内部測量	備考	測量 方法	状況
E-191	漆器	漆	SI390	残存約1.5 口径8.4	ロクロナデ	ロクロナデ、カエリ有り	I 1	35	679
E-187	漆器	漆	SI390	残存約1.25	端部ロクロナデ、天井部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-201	漆器	漆	SI390	残存約2.1	天井部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-204	漆器	漆	SI390	残存約1.9 口径21.3	天井・底部ロクロナデ、人井部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-212	漆器	漆	SI390	残存約1.2 口径12.2	ロクロナデ、体部に裂けあり	ロクロナデ	II	35	680
C-443	土師器	灰	SI390	残存約4.7 口径19.2	口縁部ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色焼成	A I 1	35	680
C-438	土師器	灰	SI390	残存約4.1 口径17.8	縁部羅ヨコナデ、底部手打ちヘラケズリ	ヘラミガキ	A II 2	35	680
C-440	土師器	灰	SI390	残存約13.7 口径16.1	口縁部ヨコナデ、底部ハマテ・ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	B I	35	680
E-303	漆器	漆	SI390	残存約2.5	ロクロナデ、底部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-302	漆器	漆	SI390	残存約2.4	ロクロナデ、一部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-207	漆器	漆	SI390	残存約1.8 口径(29.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	II	35	679
E-306	漆器	漆	SI390	残存約2.1 口径(16.0)	端部ロクロナデ、体部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ、カエリ有り	F42658A.1.12	35	679
E-208	漆器	漆	SI390	残存約2.0 口径(19.2)	ロクロナデ、火炎部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II	35	679
E-200	漆器	漆	SI390	残存約2.6 口径16.0	ロクロナデ、天井部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1b	35	679
E-218	漆器	漆	SI390	残存約1.85 口径17.4	ロクロナデ、天井部凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ	II 1b	35	679
E-206	漆器	漆	SI390	残存約4.0 口径17.0	ロクロナデ・凹凸ヘラケズリ	ロクロナデ、カエリ有り	T 2a	35	679
E-195	漆器	漆	SI390	残存約2.3 口径(18.2)	口縁部ヨコナデ、底部手打ちヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	II	35	679
E-211	漆器	漆	SI390	残存約1.8 口径(24.0)	口縁部ヨコナデ、底部手打ちヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部同心丸文	II	35	680
E-210	漆器	漆	SI390	残存約9.8 残底5.6	手打ちヘラケズリ、火炎部ヨコナデ	体部ヨコナデ	II	35	680



第120図 方四町Ⅱ期官衙北部!



第156次

W-E

ESO
N350

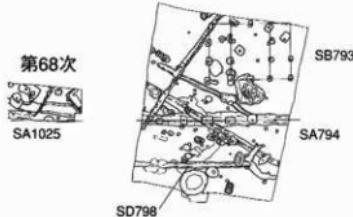


第19次

N300



第61次



N250



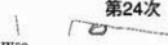
第88次



0 20m

W50

第24次



SE429井戸跡（第35次・第120、122図）

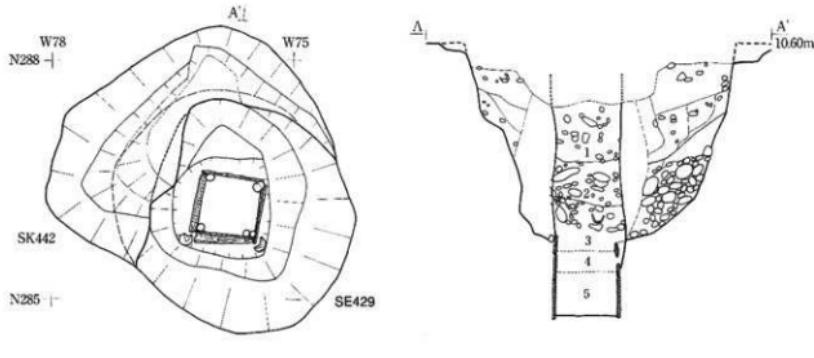
南北380cm以上、東西360cmのやや歪んだ楕円形の掘り方で、深さ250cmまでは壁が緩やかに狭まり、それより以下は直立気味となっている。底面までの深さは350cmである。掘り方中には井戸枠が設置され、検出面より深さ240cmから350cmまでの間は木質の部材が残存している。枠組の残存状況から底面より井戸枠が組まれ、掘り方上面まで達していたと考えられる。井戸枠の方向はE—0°—Sである。井戸枠の裏込めとして掘り方の中ほどでは、直径5~20cmの河原石が入れられている。

井戸枠の構造は、四隅に丸柱を立てた横板組で、上段枠組と下段枠組からなっている。下段枠組は上半部の掘り方が狭まった深さ250cmの箇所から、南北170cm、東西220cmの掘り方を掘って設置している。四隅となる箇所に直径10~14cmの丸太杭を打ち込み、それに沿って3段の横板を外側に組んでいる。板材の幅は20~50cmで下1段目は四面とも40~50cmの幅広の板材を使用している。下段枠組の高さが最も良好な西側で113cm、内法は一辺69~73cmのほぼ正方形となっている。上段枠組は南東と南西の隅木が長さ70~80cm程しか残らず不明瞭であるが、隅木の先端は杭ではなく平坦になっている。板組はその内側で組まれ、下段より一回り大きい・辺74cmとなっている。

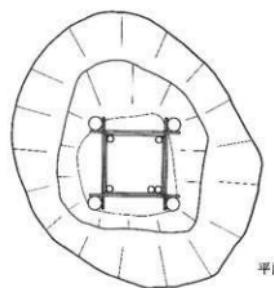
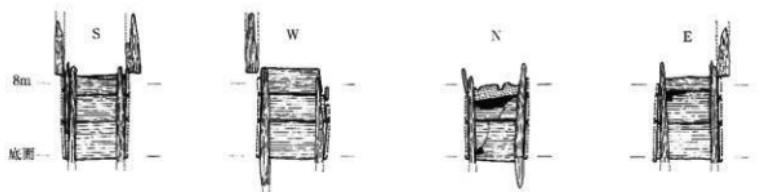
井戸枠内の堆積上は6層で、水平に堆積している。第1から第3層までは河原石が多量に入れられており、第3層以下では上層器甕が100個体ほど集中していた。出土状況は第123図に示したとおりである。土器の残存状況からは、欠損した土器を廃棄したのではなく、完形の土器が投棄されたと考えられる。

遺物は井戸枠内から多量の土師器甕と須恵器の長頸壺や鉢が出土している。そのうち土師器の甕は、長胴、球形、やや胴張りになるものや下膨らみになるものなど多様である。底部の形態も平底で木葉痕のあるものや、ヘラケズリにより平坦に形成されたもの他に、リング状を呈し中央の凹むもの(C-319・341・358・361・362・365)や丸底のもの(C-325・336・343)などがある。

SE429は素窓造構造のSI411とそれより窓むSK442を切っている。SI411とSK422が一連の掘り込みであった場合、素掘りの井戸(SI411、SK442)となる可能性がある。そうなるとSE429は素掘りの井戸を掘り直して、井戸枠のある井戸として設置されたと見ることが出来る。

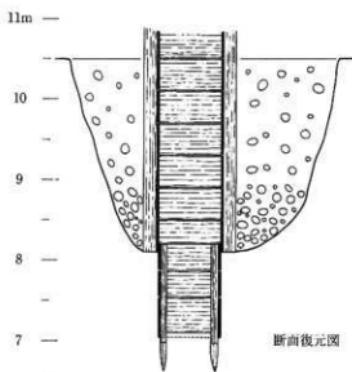


第122図 SE429 平・断面図

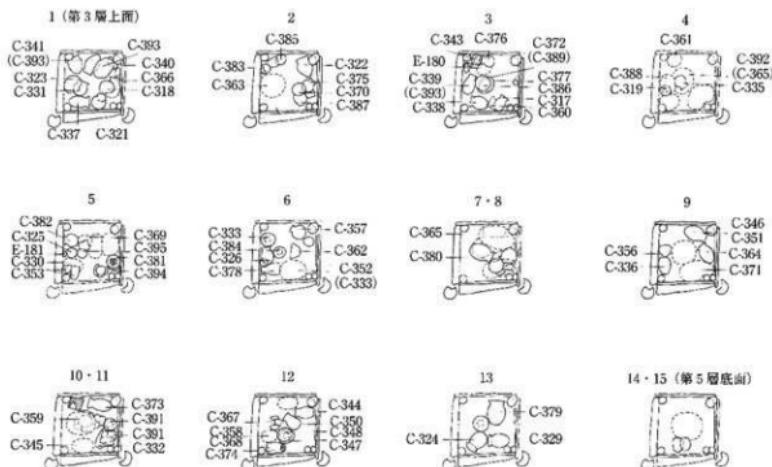


平面復元図

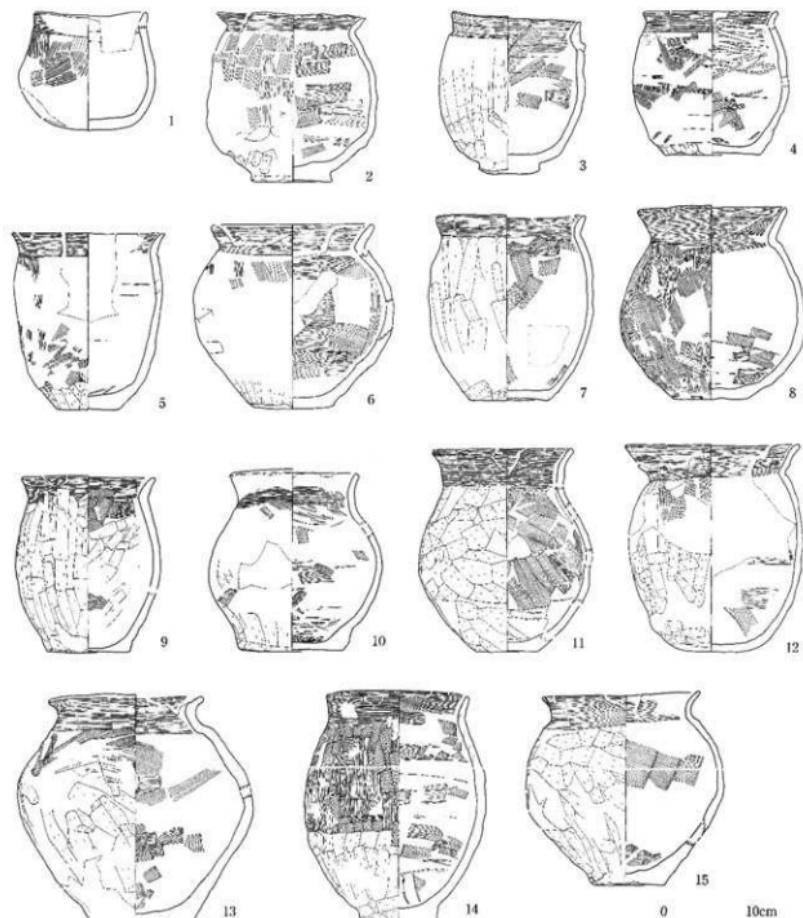
0 2m



断面復元図

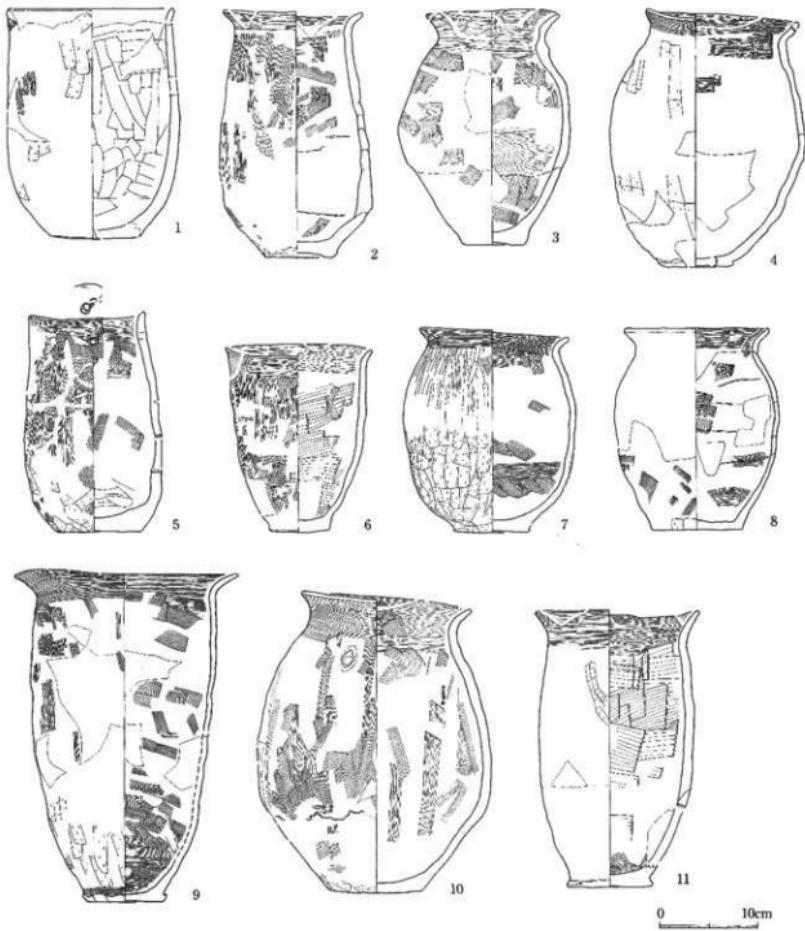


第123図 SE429 井戸横側面図・復元図・遺物出土状況



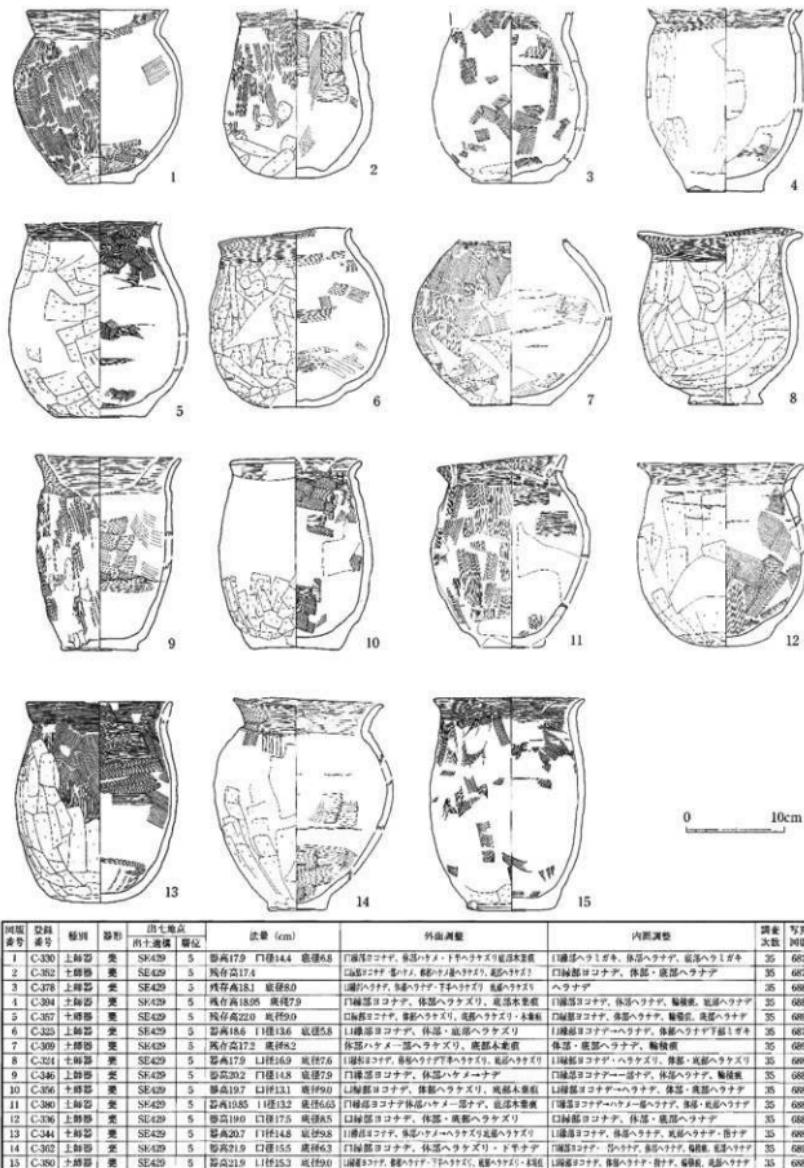
回数 番号	登録 番号	種別	器形	西十地穴		付量 (cm)	外面測定	内面測定	調査 次第 回数
				出土遺構	留置				
1	C349	土器部 蓋	SE429	3	器高11.6	11.6	上縁部ヨコナギ、体部ハケメ 上縁部ヨコナギ、体部・底部ハナナギ	底部一側ヘナナギ	35 684
2	C348	土器部 蓋	SE429	3	器高17.3	17.3	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	底部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 684
3	C315	土器部 蓋	SE429	4	器高16.2	16.2	上縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 上縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	上縁部ヨコナギ、底部ハナナギ 底部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 685
4	C316	土器部 蓋	SE429	3	器高16.8	16.8	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	底部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 684
5	C334	土器部 蓋	SE429	3	器高18.3	18.3	上縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 上縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	上縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 684
6	C360	土器部 蓋	SE429	2	器高19.1	19.1	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 684
7	C328	土器部 蓋	SE429	4	器高19.2	19.2	底縁部ヨコナギ、体部・底部ハナナギ 底縁部ヨコナギ、体部・底部ハナナギ	底縁部ヨコナギ、体部・底部ハナナギ	35 684
8	C320	土器部 蓋	SE429	3	器高20.1	20.1	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハナナギ	35 684
9	C331	土器部 蓋	SE429	4	器高18.2	18.2	底縁部ヨコナギハケメ 底縁部ヨコナギハケメ	底部一側ヘナナギ 底部一側ヘナナギ	35 684
10	C342	土器部 蓋	SE429	3	器高18.8	18.8	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	底縁部ヨコナギハナナギ 底縁部ヨコナギハナナギ	35 684
11	C375	土器部 蓋	SE429	4	器高20.4	20.4	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	35 684
12	C354	土器部 蓋	SE429	3	器高21.3	21.3	底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ 底縁部ヨコナギ、底部ハケメハナナギ	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	35 684
13	C327	土器部 蓋	SE429	4	器高23.4	23.4	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	35 684
14	C338	土器部 蓋	SE429	4	器高23.4	23.4	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	底縫部ヨコナギ 底縫部ヨコナギ	35 685
15	C323	土器部 蓋	SE429	4	器高20.1	20.1	底縁部ヨコナギ 底縁部ヨコナギ	底縫部ヨコナギ 底縫部ヨコナギ	35 686

第124図 SE429 出土遺物 (1)

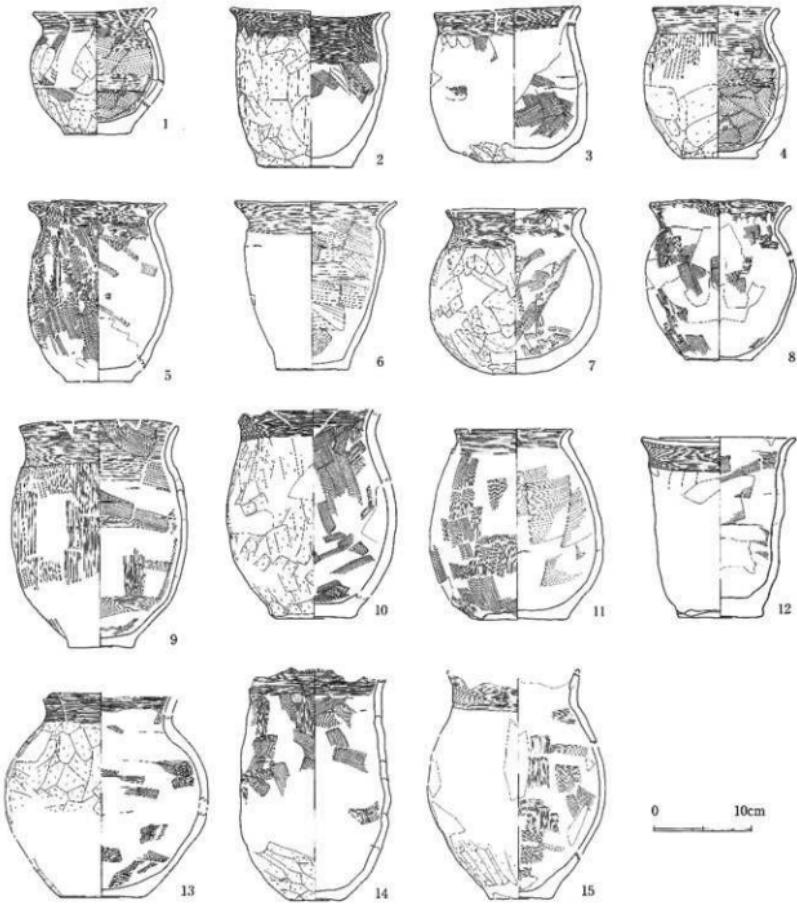


器物 番号	器種 番号	種類	器形	出土場所	法長 (cm)	外観形態	内面形態	測定 大数	写真 回数
1 C-387	土器	束	SK429	4	高さ23.7 口径16.5 底径8.0	口縁器・底部ハラナデ・ヘラケツリ、底部ヘラケツリ	折ナデ、輪筋痕	35	686
2 C-329	土器	束	SE429	5	高さ25.5 口径14.5 底径7.0	直壁コナデ・底部ハラナデ・底部ハラナデ	口縁ヨコナデ、底部・底辺ヨコナデ	35	600
3 C-365	土器	束	SK429	5	高さ34.1 口径13.6 底径6.5	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ	口縁ヨコナデ、底部・底辺ヨコナデ	35	689
4 C-388	土器	束	SE429	5	高さ36.7 口径15.2 底径7.2	直壁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底ハラナデ・底部ハラナデ	35	690
5 C-322	土器	束	SK429	4	高さ22.5 口径13.0 底径6.0	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部ハラナデ	35	686
6 C-340	土器	束	SK429	4	高さ19.1 口径15.1 底径6.5	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	686
7 C-321	土器	束	SE429	4	高さ21.1 口径15.2 底径6.7	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	696
8 C-363	土器	束	SK429	4	高さ20.9 口径16.6 底径6.5	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	686
9 C-366	土器	束	SK429	4	高さ24.4 口径24.6 底径9.0	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	686
10 C-341	土器	束	SK429	4	高さ28.4 口径17.4 底径9.0	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	686
11 C-327	土器	束	SE429	4	高さ26.0 口径17.5 底径9.0	直壁ヨコナデ・底部ハラナデ・底辺ハラナデ	口縁ヨコナデ・底部・底辺ハラナデ	35	696

第125図 SE429 出土遺物 (2)

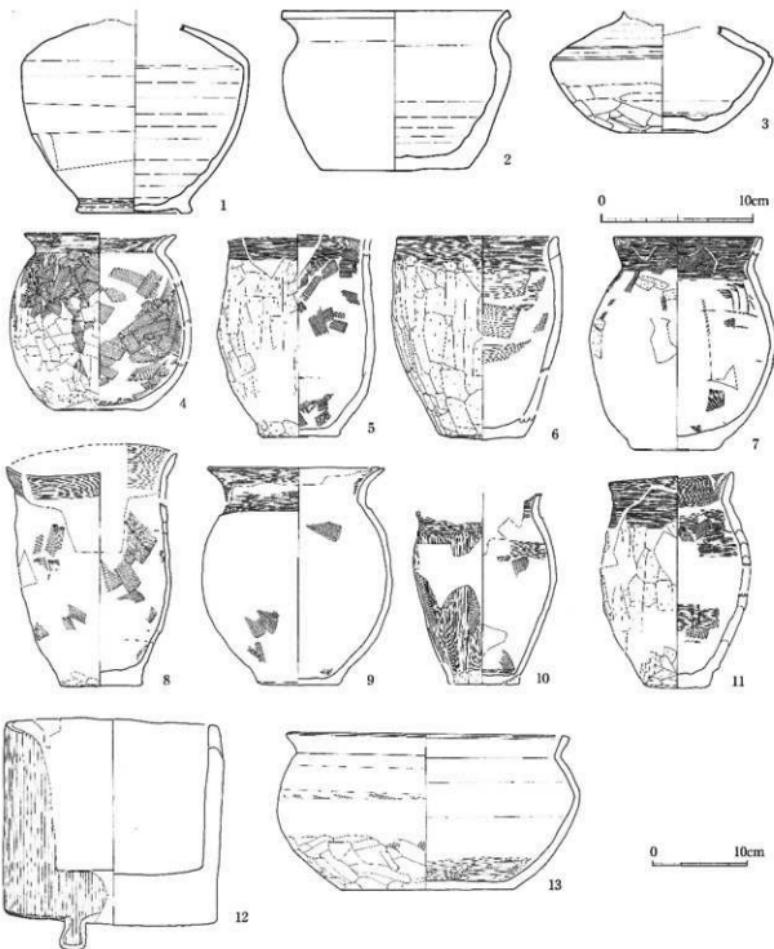


第126図 SE429 出土遺物 (3)



图版 番号	種類	器形	出土遺物		法寸(cm)	外觀調整	内部調査	測定 値	写真 回数
			出土遺物	部位					
1 C-319	土器器	束	SE429	3	高筒12.7 口径13.0 底径7.0	口縁部ヨコナギ、外部ハナメ→ハラケリ、底部ヘラクテ9	口縁部ヨコナギ、底部・側部ハナメ→ハラナデ	35	687
2 C-317	土器器	束	SE429	5	高筒16.4 口径16.7 底径9.5	口縁部ヨコナギ、底部ハラケスリ、底部本素面	口縁部ヨコナギ、外部ハナナデ・ハナメ 花花ハナナデ	35	687
3 C-348	土器器	束	SK429	5	高筒15.9 口径15.5 底径7.5	口縁部ヨコナギ、側部ハナナメ→ハラケリ、底部本素面	口縁部ヨコナギ、底部ハナナデ・輪積目	35	687
4 C-359	土器器	束	SE429	5	高筒15.6 口径12.8 底径6.0	口縁部ヨコナギ、底部ハナメ→ハラケリ、底部ハラケスリ	口縁部ヨコナギ、底部・底部ハナナデ	35	687
5 C-360	土器器	束	SK429	5	高筒18.8 口径14.2 底径8.0	口縁部ヨコナギ、一部ハラナデ、底部ナデハナメ→ハナナデ・一部斜状のハラケスリ、底部ハラケスリ	口縁部ヨコナギ→ 滲ミオキ、底部ハラナデ	35	688
6 C-345	土器器	束	SE429	5	高筒17.5 口径16.7 底径7.6	口縁部ヨコナギ	口縁部ヨコナギ→ハラナデ、体部ハラナデ	35	687
7 C-341	土器器	束	SK429	5	高筒17.1 口径14.4	口縁部ヨコナギ、底部ハラケスリ	口縁部ハケメ→ハリミダ、底部・底部ハリミキ	35	688
8 C-358	土器器	束	SE429	5	高筒16.7 口径14.3 底径7.1	口縁部ヨコナギ、底部・底部ヘラナデ	口縁部ヨコナギ→ハラナデ・体部・底部ヘラナデ	35	687
9 C-379	土器器	束	SE429	5	高筒23.3 口径16.3 底径10.0	口縁部ヨコナギ、底部ハケスリ、底部ヘラケスリ	窓ヨリナメ→ハナメ、粘付ナメ→ハラナデ、輪積目	35	689
10 C-376	土器器	束	SE429	5	高筒21.5 底径8.2	口縁部ヨコナギ、体部・底部ヘラカズリ	口縁部ヨコナギ→ハラナデ、体部・底部ヘラナデ	35	689
11 C-372	土器器	束	SE429	5	高筒19.6 口径12.1 底径8.3	口縁部ヨコナギ、体部ハマメ、底部本素面	口縁部ヨコナギ→ハラナデ、体部ヘラナデ	35	688
12 C-388	土器器	束	SE429	5	高筒18.5 口径13.9 底径6.6	口縁部ヨコナギ、体部ナデ、底部ハラケスリ	口縁部ヨコナギ→ハラナデ・体部・底部ヘラナデ	35	688
13 C-386	土器器	束	SE429	5	高筒16.1 口径9.3	体部ナデ、底部本素面	口縁部ヨコナギ、体部ハラケスリ、底部本素面	35	689
14 C-353	土器器	束	SE429	5	高筒20.5 底径11.1	口縁部ヨコナギ、体部ハナメ・ハラケスリ、底部本素面	口縁部ヨコナギ、体部ハナナデ、輪積目	35	690
15 C-361	土器器	束	SE429	5	高筒22.2 底径6.8	口縁部ヨコナギ、体部下部ハラケスリ、底部本素面	体部・底部ヘラナデ	35	690

第127図 SE429 出土遺物(4)



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点	出土遺物	法寸(cm)	外観調査	内面調査	測定 大きさ	参考 図版
1	E-180	須恵器	長颈瓶	SE429	5	高径12.7 幅径7.6	口縁ナメ、腹部に立體模様、腰帶部にハチ彫り、ウリナ形、底面ハチ彫り	体部・底部ロコナデ、ウルシ付垂	35	
2	E-178	須恵器	瓶	SE429	3	高径16.9 口径7.46 径底9.2	口縁ナメ、底面ハチ彫り、腹部に模様、腰帶部にハチ彫り	体部・底部ロコナデ	35	686
3	E-181	須恵器	長颈瓶	SE429	5	底径20.0 高径5.8	裏面「十」字ロコナデ、腹に立體模様、底面ハチ彫り、腰帶部ハチ彫り	体部・底部ロコナデ	35	690
4	C-259	土師器	甕	SE429	5	高径18.1 口径16.5 幅径8.8	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ、底部本糞面	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ、底部本糞面	35	687
5	C-268	土師器	甕	SE429	5	残高20.0 口径8.4	口縁部ヨコナデ、底面ハラケズリ、底部本糞面	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ、底部本糞面	35	688
6	C-173	土師器	甕	SE429	5	高径16.6 口径17.0 幅径9.0	口縁部ヨコナデハラケズリ、体部・底部ハラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	35	689
7	C-267	土師器	甕	SE429	9	高径22.7 口径15.7 幅径9.0	口縁ヨコナデハラケズリ、底面ハラケズリ、底部ハラケズリ、底部本糞面	口縁ヨコナデハラケズリ、底部ハラケズリ、底部本糞面	35	690
8	C-391	土師器	甕	SE429	5	高径21.3 口径19.6 幅径8.3	口縁ヨコナデハラケズリ、底部ハラケズリ、底部本糞面	口縁ヨコナデ、体部・底部ハラケズリ	35	690
9	C-351	土師器	甕	SE429	5	高径22.2 口径18.5 幅径8.9	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ、底部ハラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部・底部ハラケズリ	35	689
10	C-364	土師器	甕	SE429	5	残高20.0 口径8.6	口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ、底部本糞面	口縁部ヨコナデ、体部・底部ハラケズリ	35	688
11	C-382	土師器	甕	SE429	5	高径22.0 口径13.2 幅径7.0	口縁部ヨコナデ、体部・底部ハラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部・底部ハラケズリ	35	689
12	L-5	木製品	輪	SE429	5	直径21.9 口径13.2 底径22.4	口縁ヨコナデ、底面ハラケズリ、底部本糞面	口縁ヨコナデ、底面ハラケズリ	35	
13	E-182	須恵器	盆	SE429	3	高径16.9 口径28.5 幅径18.1	口縁ヨコナデ、底面ハラケズリ、底部本糞面	口縁ヨコナデ、底面ハラケズリ	35	690

第128図 SE429 出土遺物 (5)

[方四町Ⅱ期官衙北辺]

SA616材木列一方四町Ⅱ期官衙北辺—(第49、59、148次・第132図)

直径15~30cmの丸材の柱痕跡がE—1°—N方向に密接して検出された。柱痕跡は木質部が残存せず、掘り方の底面から上面まで伸びている。底面付近で柱痕跡から染み出るよう土質が変化し、白色粘土化している。本来の掘り方の範囲より広がっているため、柱材の腐蝕する段階で周囲に影響したものと考えられる。

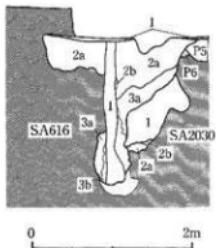
掘り方は上幅50~240cm以上で下部に向かって狭まっており、深さ50cmの所で狭まり、そこから南壁が直立し、柱痕跡が密着している。底面付近で抉られたように、幅が広くなる。検出面からの深さは190cmとなっている。抜き取り痕跡は確認されなかった(第148次)。

遺物は掘り方中より扁平な掉痕や敲打痕のあるK-254砾石器の他、多数の上師器、須恵器の小片が出土している。また柱痕跡よりも土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SB2040建物跡を切り、SA616材木列、SD2076溝跡、SK2097土坑に切られている。

第148次調査区西壁

— 12.00m



遺構名・番号	上・色	上・性	備考
SA616			
柱痕跡 1	10YR4/4 黄褐色	粘土	遺物に白色土上、薄化粧が残存している
2a	10YR4/4 に近い黄褐色	粘土	黑色粘土を斑状に含む
2b	10YR7/2 に近い黄褐色	粘土	黑色粘土を含む
3a	10YR4/3 に近い青褐色	粘土	白色粘土を斑状に含む
3b	10YR7/2 に近い黄褐色	粘土	黑色粘土を含む
SA2030			
R1疊瓦 1	10YR6/4 に近い青褐色	粘土質シルト	黑色粘土をブロック状に含む
2a	10YR7/6 明眞褐色	粘土質シルト	黑色粘土を少量含む
2b	10YR6/2 深眞褐色	粘土	
P6	1 10YR4/2 灰眞褐色	粘土質シルト	黒化粧が発達している
P6	1 10YR4/2 灰眞褐色	粘土質シルト	

第129図 SA616 断面図

SD617溝跡—大溝一(第49、79、95次・第131、132図)

上幅5m以上、下幅1m、深さ90cm程度で、断面形は扁平な逆台形である(第49次)。また別な地点では溝跡に凹凸があり、A溝跡部分とB溝跡部分に分かれれる。A溝跡は幅2.65m、深さ85cm程度、B溝跡は幅1.25m、深さ30cmである(第79次)。方向はほぼ真東西方向で、溝の中央から北の材木列まで8.7mである(第49次)。

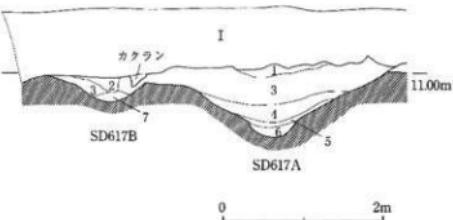
方四町Ⅱ期官衙北辺となる大溝跡である。

SI1206堅穴住居跡を切っている。

SA787材木列(第59次)

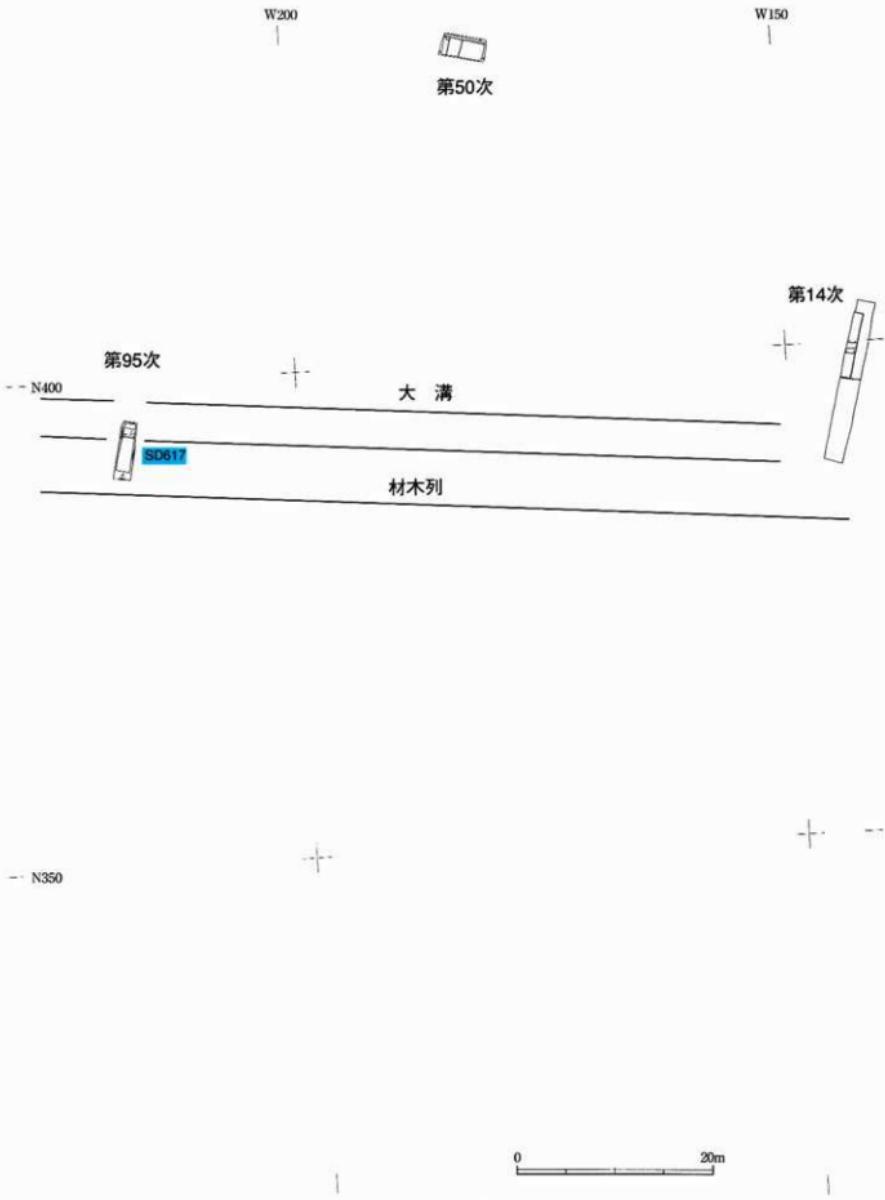
方四町Ⅱ期官衙北辺となるSA616材木列の南へ約33mの位置にあたり、掘り方の上幅は70cm、下幅40cm、深さ100cmである。検出した範囲が60cmと狭いが真東西方向に延び、壁は直立気味となり底面は平坦である。材痕跡の一部も検出されていることから崩壊と見られ、方四町Ⅱ期官衙の内部区画と考えられる。

第79次調査区東壁



層	上・色	上・性	備考
基本水位			粘土
I			
1 10YR3/3 赤褐色	シルト	黄褐色シルト混入	
2 10YR3/4 黄褐色	シルト	青苔土混入	
3 10YR4/2 茶色	シルト	透水性、小礫を含む	
4 10YR4/3 に近い青褐色	シルト	やや粗粒	
5 10YR4/3 に近い青褐色	シルト	やや砂質	
6 10YR5/2 灰眞褐色	シルト		
7 10YR5/4 に近い青褐色	シルト		

第130図 SD617 断面図



第131図 方四町Ⅱ期官衙北辺1

W100

W50

— N400

第79次

大溝

木材列

(SI1201)

(SI1206)

第148次

(SI2084)

— N350

+

第30次

第1次



0

20m

第132図 方四町Ⅱ期官衙北辺2

2. 南方官衙

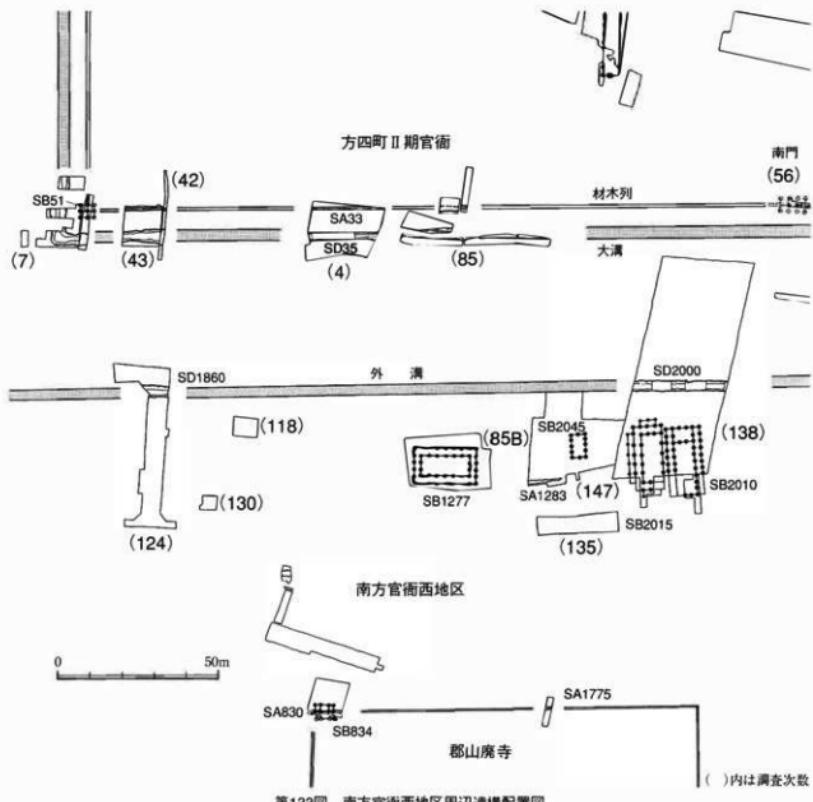
南方官衙は方四町II期官衙の南に、正殿やその周辺の主要建物と同等か、より規模が大きい建物により構成されている。建物の北側は「外溝」としたSD2000溝跡(註14)により遮蔽されており、その南側に整然と並んでいる。便宜上、東地区と西地区に分けているが、どのようなまとまりになって機能していたかについては明らかではない。

【南方官衙西地区】

SB1277建物跡 (第85次・第133、136図)

桁行8間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法240~278cm、平均260cm、廊部分柱間寸法185~218cm、平均199cm)、梁行5間、総長11m(身舎部分柱間寸法190~225cm、平均207cm、廊部分柱間寸法227~257cm、平均240cm)の東西棟の四面廂付建物跡で、梁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は一辺62~142cmの隅丸長方形、隅丸方形、あるいは不整形を呈する。柱痕跡は身舎で直径23~31cm、廊で直径18~31cmである。柱穴の深さは廊で14~24cmである。柱穴掘りの方の埋土や柱痕跡には炭化物や焼土は含まれていない。

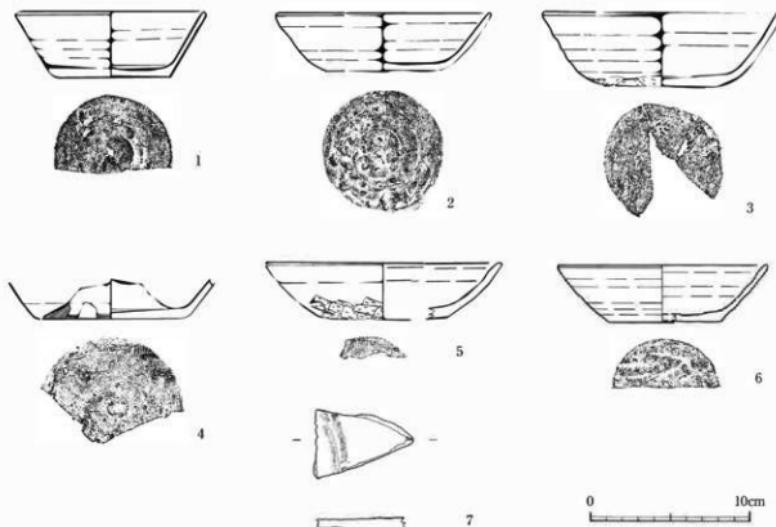
SB1278・1280建物跡、SA1283材木列を切っている。



SB2010建物跡（第138次・第133、137図）

桁行10間、総長21m（身舎部分柱間寸法200~220cm、平均210cm）、梁行5間、総長10.8m（身舎部分柱間寸法210~220cm、平均220cm、廂部分柱間寸法200~220cm）の南北棟で、東西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の東桁行でN-3°-Wである。身舎の柱穴は一辺85~120cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径25~38cmの円形または梢円形である。身舎は北から2間のところで仕切られている。柱穴掘り方や柱痕跡は、身舎が廂に比べてやや大きくなっている。柱痕跡は木質の材が残っているもの（N11E2柱穴）がある。また各柱穴の柱は抜き取り、あるいは切り取りを受けており、柱下部が地中に残ったもの（N10E2柱穴）もある。

遺物は掘り方中では、N7E1から器種は不明であるが外面に二条の墨痕のある土師器C-916底部片（第134図7、写真図版772）、N3E3からは長さ5.5cmの頂部が平坦なN-110釘（写真図版772）が、N4W2からも長さ9.5cmの釘状の鉄製品N-109（写真図版772）が出土している。抜き取り穴ではN5E2から高さ6.5cm以上の円面鏡、N6E1からは底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリされた須恵器E-456坏（第134図1）、N6W2からは長さ4.5cmの釘状の鉄製品N-108（写真図版772）、N9E2からは回転ヘラ切り痕跡が観察される須恵器E-458坏（第134図4）、N11E2からは宝珠形のツマミを有する大形の須恵器E-466蓋の破片（写真図版772）、N11E3からは内部に緑色の鉱物を含むK-253鉱石（写真図版772）が出土している。このほかN11E2の抜き取り穴からは、底部に回転ヘラ切り後手持ちヘラ



図版 番号	登録 番号	種類	器形	出土地点 出土遺構	層位	法量 (cm)	外面調整	内面調整	備考	調査 次数	写真 図版
1	E-456	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高4.1 口径12.0 底径7.4	口縁部・体部・ロクロナデ	口縁部・体部・ロクロナデ	II 1b	138	772
2	E-467	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高1.6 口径13.6 底径2.2	口縁部・体部・ロクロナデ	口縁部・体部・ロクロナデ	II 1b	138	772
3	E-451	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高4.4 口径15.0 底径7.0	口縁部・体部・ロクロナデ	口縁部・体部・ロクロナデ	II 1b	138	772
4	E-458	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高2.5 底径9.6	斜面1.0ナメナチ、底面1.0ナメナチ	斜面1.0ナメナチ、底面1.0ナメナチ	II 1	138	772
5	E-453	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高3.6 口径14.7 底径7.8	斜面1.0ナメナチ、底面1.0ナメナチ	斜面1.0ナメナチ、底面1.0ナメナチ	II 1b	138	772
6	E-452	須恵器	坏	SB2010E1	014E1	器高1.6 口径13.1 底径7.0	口縁部・体部・ロクロナデ	口縁部・体部・ロクロナデ	II 1b	138	772
7	C-916	土師器	坏	SB2010E1	014E1	器高5.5	二条の墨痕あり	黑色処理	A	138	772

第134図 SB2010 出土遺物

ケズリがされた須恵器E-452・467壺(第134図6、2)、底部に手持ちヘラケズリのみが観察される須恵器E-453壺(第134図5)などの多くの遺物が出土している。

SD1951・1995溝跡を切り、SD2008・2018・2019溝跡に切られている。

SB2015建物跡(第138次・第133、137図)

桁行7間、総長19.6m(身舎部分柱間寸法280~310cm、平均298cm、廂部分柱間寸法230cm)、梁行4間、総長8.8m(身舎部分柱間寸法200~225cm、平均215cm、廂部分柱間寸法225cm)の南北棟で、南、北、西に廂を有する建物跡である。方向は身舎の西桁行でN=1°-Wである。身舎の柱穴は一辺83~140cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径20~40cmの円形または楕円形である。廂の柱穴は一辺60~123cmの長方形で、柱板痕跡は直径20~36cmの円形または楕円形である。各柱穴の掘り方や柱間寸法にややばらつきがある。柱穴の掘り方や柱痕跡は身舎が廂に比べやや大きくなっている。ほとんどの柱穴に抜き取り穴が見られるが、西桁行の抜き取り穴は掘り方底面に及んでいる。柱痕跡の中には、木質部が残っているもの(N2E5、N3E5、N5E5柱穴)がある。さらに廂のある建物の南、北、西側には、掘り方が直径27~40cm程の円形で、直径10~14cmの柱痕跡が伴う柱穴が取り付いている。

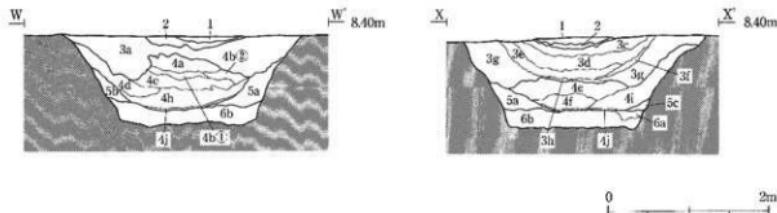
遺物は、柱穴の抜き取り穴N1E4から鉄滓、N4W2、N7E3から瓦片、各柱穴より土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

SA1910材木列、SD1995・1951・1952溝跡を切り、SD2002・2003・2009・2013・2031・2041溝跡に切られている。

SD2000溝跡(第138次・第133、137図)

上幅300~340cm、底面幅160~170cm、深さ120cm程、断面形は逆台形の溝跡であり、おおむね平坦である。第65次調査のSD984溝跡や第124次調査のSD1860溝跡と連続する遺構である。方向はE=0°-S(真東西)で、第65次調査から第124次調査で検出した箇所まで360m程である。方四町II期官街の外郭大溝と心々で48~50m離れて平行している。堆積土中の第2層は灰白色火山灰である。

遺物は第138次調査区内の第1層中より底部に回転系切り痕跡が観察される土師器壺、鉄滓、鉄片、第3層中よ



遺構名	位置	土 色	土 性	備 考	遺構名	位置	土 色	土 性	備 考
SD2000	1	10YTR4/2 灰褐色	粘土		1b	2.5Y7/2 灰褐色	粘土	灰褐色	黒褐色粘土が頭かく
	2	10YWR6/2 灰褐色	火山灰	「灰褐色火山灰」	10TR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色	混合している	
	3a	10YRS5/1 灰褐色	粘土	細かくマンガン酸を含む	10YR6/2 灰褐色	粘土	灰褐色		
	3b	10YTR4/4 灰色	粘土質シルト	(測定位置)	10TR3/3 黒褐色	粘土	灰褐色		
	3c	10YTR4/4 灰褐色	粘土		10YR7/4 に多い青褐色	シルト	灰褐色	黒褐色粘土とともに、青褐色シルトの混在層	
	3d	10YTR4/4 灰褐色	粘土	褐色粘土を小ブロックで含む	3Y3/1 オリーブ頭	粘土	灰褐色		
	3e	10YTR4/4 灰褐色	粘土		10TR3/1 黒褐色	粘土	黒褐色	黒褐色粘土に多い青褐色シルトの混合層	
	3f	10YTR4/2 灰褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む	10YR6/4 に多い青褐色	シルト	灰褐色		
	3g	10YTR4/2 灰褐色	砂質粘土	褐色土を全体に細かく含む	10TR4/6 黑色	粘土シルト	黒褐色		
	3h	5Y4/1 灰色	粘土	「黒褐色」(10TR4/2)、「灰褐色」(10TR4/4)	10YR4/1 黑色	粘土	灰褐色	灰褐色粘土がはじまる	
	4f	10YTR4/4 灰褐色	粘土		2.5Y5/1 灰褐色	粘土	灰褐色	黒褐色粘土を含む(アライ)	
	4g	10YR3/1 灰褐色	粘土						
	4h	10YRS5/1 灰褐色	粘土	3a層に灰土。地上に廃棄物を含む					
	4c	10YR7/6 可燃性褐色	粘土	3b層と黒褐色粘土。(測定位置)					
	4d	10YR4/2 灰褐色	粘土						
	4e	2.5Y5/1 灰色	粘土						
	4f	5Y5/1 灰色	粘土						
	4g	10YR4/2 灰褐色	粘土	褐鐵酸化粘土(唐草)を含む(測定位置)					

第135図 SD2000 断面図

W250

W200

外溝

第118次

S100

第85次B区

(SB1278)

SA1283

第147次

第33次

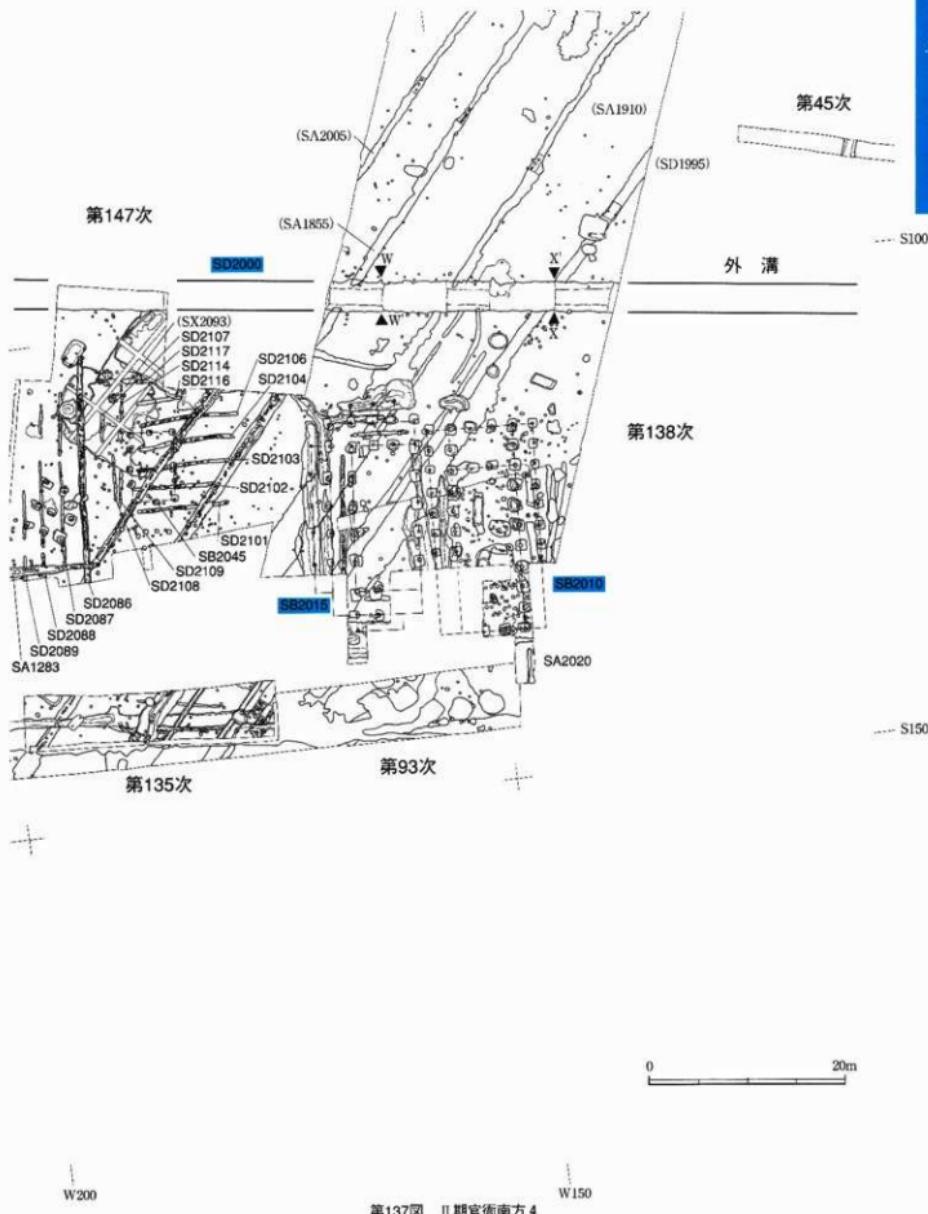
S150

第84次

第93次

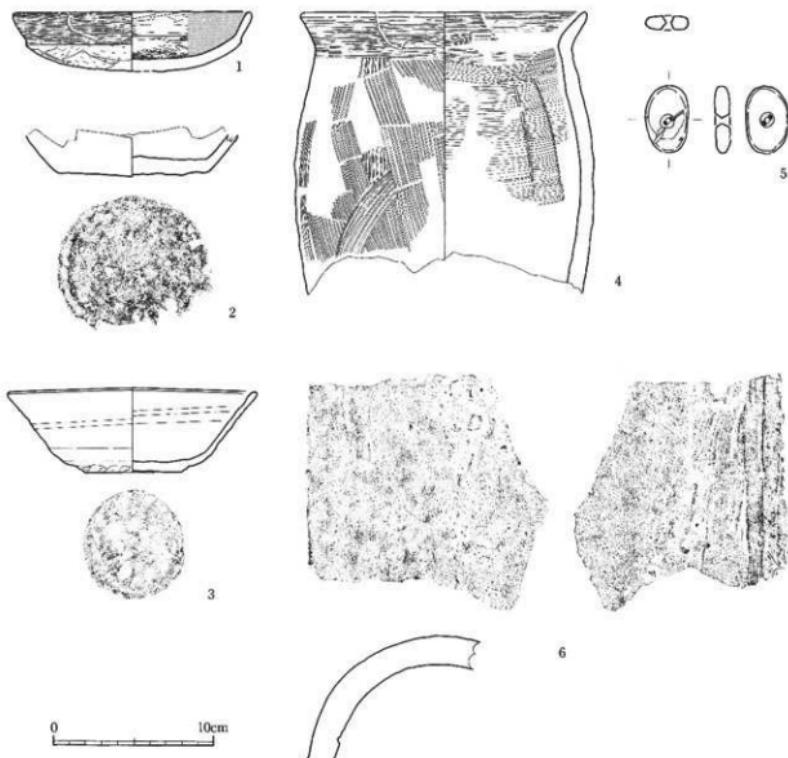
0 20m

第136図 Ⅱ期官衙南方 3



り凸面に擦り消しが施されたF-95丸瓦(第138図6)、焼け面のある砾石器、第4層上面よりは内面が黒色処理され体部中央に段のある土師器C-897壺(第138図1)、第4層中より外面がハケメ調整された長胴形の土師器C-900壺(第138図4)、底部に手持ちヘラケズリされた須恵器E-454壺(第138図3)、第6層中より底部のみの繩文土器A-4鉢(第138図2)、直径0.3cm程の孔のあるK-250有孔石製品(第138図5)、内面にカエリのある須恵器の蓋などが出土している。また第65次調査区内の堆積土中からは塊形滓や丸瓦片(註15)、第124次調査区内の堆積土中からは底部に回転ヘラケズリの施された須恵器壺やカエリのある蓋と対になる須恵器壺、繩叩きの後ナデ調整のされた桶巻き作りの平瓦片(註16)などが出土している。

第138次調査区ではSA1855・1910材木列、SD1952・1955溝跡を切っている。第65次調査区ではSI992竪穴住居跡を切り、SD345・1164溝跡に切られている。



層段	標識番号	幅員	断面	出土地点	出土地點	遺物	測量 (cm)	外面調査	内面調査	参考	年份
1	C-897	土師器	壺	SD2000	4	器高26.1口径49.0直径13.4		口縁部ヨコナギ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	A II	773
2	A-4	繩文土器	鉢	SD2000	5	底面 外径23.0 直径9.4		体部ヨガキ、底部ヘラケズリ	体部・底部ナデ		773
3	E-454	須恵器	壺	SD2000	4	器高5.2 口径15.8 直径6.0		1面底・側面ヨコナギ、底部持手ヘラケズリ	ヨロナギ	II lb	773
4	C-900	土師器	壺	SD2000	4	器高17.6 口径17.8		口縁部ヨコナギ、体部ハケメ	口縁部ハケメ、体部ヘラナデ	H1	773
5	K-250	有孔石製品	砾石	SD2000	6	直径9.42 横幅28.0 厚さ9.9		穴に輪削ケズリ痕有			773
6	F-95	瓦	丸瓦	SD2000	3	輪厚10.7 直径51.4		凸面すり削し、凹面あ切りのち漆目底、ケズリ			773

第138図 SD2000 出土遺物

[南方官衙東地区]

SB1191建物跡（第65次・第140図）

東西5間かそれ以上、総長13mかそれ以上（柱間寸法250～270cm）、南北1間以上、総長2.7m以上（柱間寸法270cm）の東西棟の建物跡で、東西柱列の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺74～190cmの隅丸方形か隅丸台形で、深さは99cm程のものがある。柱痕跡は直径22～35cmであるが、30cmのものが多い。周囲の掘立柱建物跡と比べて柱痕跡や掘り方の規模で傑出している。建物の北と東側をSD1190・1308溝跡が140～180cm程離れて巡っている。

SD345・921・1305溝跡に切られている。

SB1306建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.7m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法250～265cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-2°-Sである。柱穴は一辺70～155cmの隅丸方形か隅丸長方形で、深さは42～92cmである。柱痕跡は直径15～34cmで、20cm前後のものが多い。痕跡の中に焼土と炭化物を含んでいることから、火災に遭ったと考えられる。建物の東、西、南側をSD1319・1188・1180溝跡が、柱穴より100～120cm離れて巡っている。

遺物は柱穴掘り方より、底部より体部へ屈曲して立ち上がる土師器<中>C-123壺などが出土している。

SD345溝跡に切られている。

SB1320建物跡（第65次・第140図）

桁行10間、総長23.5m（柱間寸法220～250cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法230～280cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-1°-Sである。柱穴は一辺70～210cmの隅丸方形か隅丸長方形で、柱痕跡は直径13～33cmであるが、20～30cmのものが多い。抜き取りがあり、その深度が深いため柱痕跡が検出されない柱穴もある。

遺物の東、南側をSD1333・1336溝跡が、柱穴より110～150cm離れて巡っている。これらの溝跡の堆積土中には焼土と炭化物が含まれ、柱の抜き取り穴にも炭化物が含まれるものがあることから、SB1320建物跡が火災に遭ったと考えられる。

遺物は柱穴抜き取り穴より、土師器<中>C-94・124壺などが出土している。

SB1321建物跡（第65次・第140図）

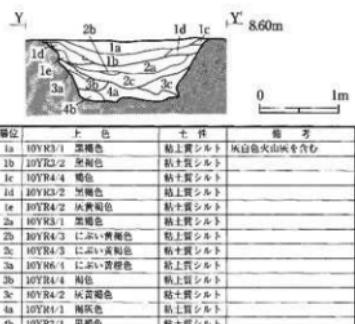
桁行10間、総長23.3m（柱間寸法210～270cm）、梁行2間、総長5m（柱間寸法250cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE-3°-Sである。柱穴は一辺85～155cmの隅丸方形か隅丸長方形であるが、周囲の建物跡の柱穴掘り方に比べ平面形が丸みを帯びている。柱穴の深さは60～70cm程で、柱痕跡は直径11～25cmで、20cm前後のものが多い。抜き取りは認められない。

SD476溝跡（第41、94次・第141図）

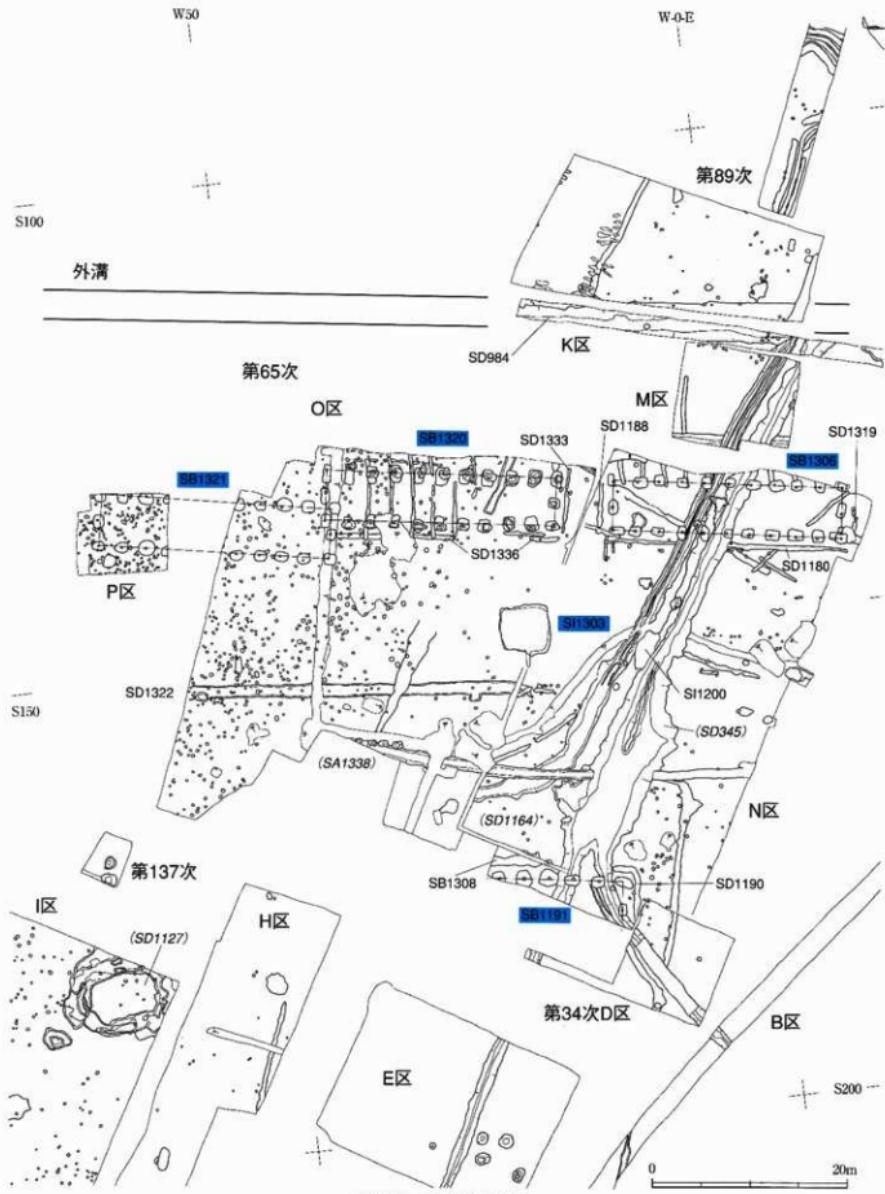
上幅150～270cm、底面幅60～160cm、深さ70～100cm程、断面形は逆台形あるいは扁平なU字形の溝跡であり、おおむね平坦である。南の第41次調査区にも続く溝跡である。方向はN-2°-WからN-0°-Eで、第41次調査から第94次調査まで45m程検出し、さらに南北に続いている。堆積土は4層である。第41次調査区内では、最上層に灰白色火山灰が多量に含まれていた。外溝の形状に類似している。

遺物は堆積土中から土師器、須恵器片が少量出土している。

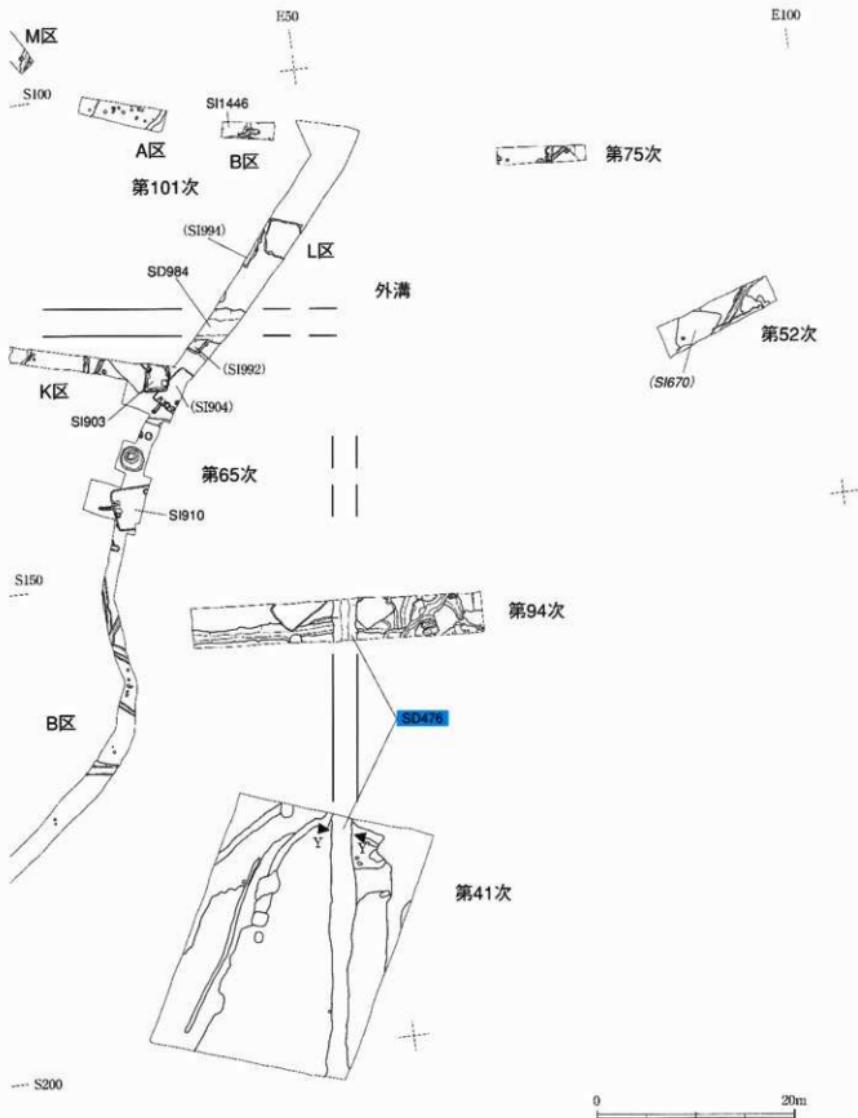
SI1361堅穴住居跡を切り、SD1356溝跡に切られている。



第139図 SD476 断面図



第140図 Ⅱ期官衙南方5



第141図 Ⅱ期官衙南方6